



三養雜記

廿五

一一二

文

15
1491
1



門
1041
卷

大
32152
書

門 5
號 1491
卷 1



山崎久徳必ハ美成号を以峰とらん
ありて予と我宅はかゝるを以て
其に古家峯とてかくとやをもめい
形を以て葬句の古歌より内記を以
たしめられたるは其を以てまゝに
其れより市店の変よりして世に
下ありたりしは其を以て其れを以
て其れを以て其れを以て其れを以

本相平

早稲田 大學 図書館
昭 35. 1 25 蔵
藏 書

彼よりとて人面をけ歌う隠操と
 ころろと於陵若ぬあのかく浦と
 とつらぬ何つともさ中かきとち
 きい山吹のふき移は備品一杜門謝あ
 とよ急何ゆゆいゆいしきと海と
 靴のる若くつらゆいゆいさちと
 赤きとたとりゆゆいの松を子権と
 並とゆいゆいゆいゆいゆいゆい

くらとゆいゆいゆいゆいゆいゆい
 小回為おあゆゆいゆいゆいゆい
 如きあつや一事のゆいゆいゆい
 きに新聞ま出てゆいゆいゆいゆい
 しゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
 もゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
 子のゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
 つ見ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

おとりのみ...
あつら天保の十とらふから入形、月廿
日あやう小堂形、後、枳場の南軒
り、う、う、う、かき、

三養雜記卷一目録

元日子ハゼをまゝ

萬歳

初午稻荷詣

六郷橋

観音籤

福主靈籤

書を手と云

魁星

おそく

屠蘇少年より飲始

七種のそや詞

地口

英一蝶女達磨の畫

關帝籤

竹帙

上大人

字謎

多ひす紙

實語教

新吉原燈籠

河東節

わけま

朱硯

地震ふく晴雨を知歌

五九月

鯨帯

童子教

玉菊小傳

男色

香の圖

圓轉圖

雨は長短をある歌

狐狸の書畫

三養雜記卷一

神無月をあり雨多し夜半火桶をくく書よるゝ
ア小木枯の窓より聲は浙漚るをりや、くや行未
乃とむも世ひつげく、

よやあや実ある世のなぐりぬる夜をけくあ
時雨多しとら詠免つたのみ境に臨み物干觸まこ
そ六塵の樂欲はつてくやたむ揚州は鶴ありとも是れり
世もあぬ人心の常るれハ命をけく願ふも身成終るま
心子任すりものあるもきや窮達ハ命けり、歎くべきあ
次をく歡ぶべきも何せず、世捨人も異あぬおのれを

ごがはら六月華のなごめをさるり、ころれとふ日を経ん
こそ願りしれ今茲も暮ゆく空近くぬりて、金杉の里子家
をさるり頃東坡が詞の三養をさるびく、是くて事たる
つとめの住うなご書ごも、大々人れ家にあづけられど、
今ハ一卷た子傍みれ、机の塵と拂いて日そあもふ小年
もあけて天保九年戊戌元日もた霞のち子引くきも春めきて、日
ふけのどやよ、田井れあぐえハ市子うりく華鳥の色音
るりきた何のまけもれなれに心ざうりハころやぎさるころち
ぞせらるる長ま日のつれあがもめんを暗記もあつせく
日ごと小せひ出るまくにうまつくあぞせめての心やりあふ

元日タビシハハセとまき

近きころまで元日の朝まごきハハセとまきぬりありて、ハ
賣とらぬのあまぬく来りく、りく武家ものこそ風遺
りく、町ハ賣來はありく、まごめと伊豆ハ三島明神の池
の鮒も明神れつら、免あり云つて毎年元日池乃
鮒ハハセとまきてあつる神事あり、元日ハハセとまきことハ
りハ神事起源なご、伊勢安齋の説れり、又ある人の説ハ
むりハハセする料の餅米をのめて、家に煎り試むるよ、
くハせる年ハ吉ハセのあき年ハ凶れり、と占よとあり、
後ハハハセ買くまきことを吉兆とするのこあり、と

又、按子戒蕃漫筆に東入吳門十萬家家、爆穀卜年
華と云ふハ爆字婁の詩あり、これを併セ替ハ和漢一般の
風習あり、ある人此説をよとす、何事也年月を
追ひて、便利子此あり行、おん多う、春のおふけの注連
繩も家ごとに藁をりて、造まるを、後ハ年の市、ゆきて
買調う、おんよそ、おんおねたり、おん今ハ町の辻、おんて
擔ひあり、おんても賣ると、おんなり、おん居、おんむ、おんなり
たり、年の市も、おんハ雜器市と、淺草寺、おんなり、おん今
ハ所の神社、おん多く、おんでき、おんなり、

屠蕪少年より飲始

屠蕪子、おんりて、おん年の、おん飲始、おんハ、おん荆楚歳時
記、おん進屠蕪酒、おん飲酒次第、おん從小起、おん註に、おん後漢書董勛
が言を引、おん俗有歳首用椒酒、おん飲酒先小者、おん以小者得
歳先酒、おん賀之、おん老者失歳、おん故後與酒、おんと云、おん吾邦の古
も亦あり、おん内裏式、おん元日就内侍、おん取執盛屠蕪、おん云尚藥
供御先賜、おん少年と、おん又屠蕪、おん攷云、おん盧柳南小簡、おん屠
蕪、おん甲幼あり、おん始む、おんと、おん不遜あり、おん元日ハ、おん一歳の始、おん免長幼の
分を正、おん長者あり、おん始む、おんと、おんと、おん六理、おんさあ、おんき、おんと、おん子間、おんゆ
ま、おんと、おん考の、おん是、おんと、おんふ、おん似、おんと、おん其、おんあり、おんハ、おん屠蕪、おんをも、おん邪氣、おんを、おん辟、おんる、おん藥
方、おんあり、おんハ、おん甲幼、おんあり、おんと、おん始む、おんハ、おん全く、おん藥、おんを用、おんゆ、おん法、おんを、おん借、おんた、おんと、

松石曰按賈誼
新書修政語
上曰湯曰藥食
嘗於早然後
至於貴云々

と思ひ、禮記小君の藥を飲み、臣先嘗ひ親此藥を飲み、
子先嘗ひ之、説苑子殷此湯王の言を載せて藥食卑
に嘗て貴子至る、つたに考ふる家内此人とて、
屠蕪を飲む、その名あれ、先づ、
の、誰を先か、誰を後か、故に早幼をせむとす
る、至極れ、是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、
日用ゆり、と知る、と確論とす、

萬歳

萬歳、男踏歌の餘風あり、花鳥餘情、正月十六日の節會と
ハ、女踏歌とハ、舞妓す、つづ、ゆゑなり、男踏歌を、四日あり、

殿上地下の四位以下、此輩あり、ききと、
を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、
中の遊士、月小乗して、あゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、
已事、を、を、未の代に、千秋萬歳といひ、逸興を、
とあり、これら、餘風なり、と、源語秘訣、世諺問答
の、説、を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、
參河萬歳と、地、を、を、と、遠江相模あり、來る、
を、尾張大和あり、つづ、張州府志に、無住國師所作
樂、稱萬歳樂、使小奴、德若、謳之、以為、賀正、至今、春初
稱萬歳者、師之遺愛也、とあり、無住國師道跡考あり、

も同じありしきあり尾張萬歳の唱歌ハ無住國師の作れよ
くみて今傳やまの五章あり

七種のうち一詞

正月七日ハ七種の若菜をそとふとハ都鄙を不すりこと
あり六日の夜七ををたたくちや一詞ハ七をあらかな
どれそつとあらんのとととつとみさきみといふそハ何乃
耳けもあらむあられまは家と子唱ふるそとれ桐
火桶の 冊子ハ正月七日七草をそとふ七づ七度やう
かま六四九たうやと有職此人やうと斗ありこれと云
て問やらまはそれまぐのことハとて笑つ語りたまふあら

七をハ七星あり、四十九たうハ七曜九曜廿八宿五
合せし四十九れ星とまらあり唐土の鳥と日本の鳥
とらとぬ先ハ七を藤手につて入て元紫斗張げ
みくまうがみまうして物ハ大事ハ侍ハたうといふ
あつれそそつてつとらとらありあの元紫斗張は
廿八宿の中ハ四宿とらとらも吉方の星宿あり宿曜経
さて唐土ハ鳥とらハ證とすりあとのれハあな七草
冊子とらハのハ須彌ハ南ふとらハ鳥とらハ鳥ありかの
鳥ハ長生をすりと八千年あり此鳥春のそとら毎ハ七
色の草をあらえてやすゆ急に長生成すりありそく

が鳥比命と汝が親の命子轉じくくつせ八七色の草
を集て柳の木乃ぞんふ載く王椿の枝よて正月六見
酒の時よりをいめて此草をうぐへとあり

初午縮荷詣

地口

二月初午の日縮荷詣するごと貫之集子延喜六年月並の
屏風比歌乃中子二月初午縮荷詣したる不

獨の我こそあふふあり山春のなまれ立ゆる守らん

まゝ源順集子二月初午縮荷の社ふまゝつる人子

いなり山尾のふたてりすあくに行く人の子たえぬらふ

おなごありふありせあり何とこそまゝぞ猶諸書子見え

たるとろ初午の日を用ゆるよりあむすて賀正より追儂

やで時令のともも予うりて歳時要畧子より日記したれ

ハてふりらつて江戸まゝ縮荷祭子地口行燈をう

らぬよりすありありに地口といふ土地の口あひとい

ふとまてたといふ地張きをふ地本繪冊子地酒をくり類

いつまもこの地といつる江戸をさしていふ詞ありさてそれ

行燈ふらるるを繪地口といふ繪を専子してまづづ人のあゆ

かゝるよまゝくつらるといふぬとすりあり豊芥藏弄れ小冊子

地口須天寶鸚鵡盃比言指南地口春袋をやると安永ころ

此印本なりその頃をやうくと見えたりこの地口よりさく

のつらちあり天神れ手まで口をおさへたる繪小だまりの天
 神じん、すまう 團子だんごと三串さんそうやなふ團子だんご十五三五十五あり、むし、ハチ
てきて 出来てあり、多く あつふそのや 花はな さらば 智ち びやうびやう、まて
あつふ 子あり、

達磨大師の
 茶せん乃
 す〜



あびたき



又句を長くいひつげたるを精霊のまろりと棚經の坊たきま 君きみが射いすすく
 足あしババををままぎぎ露つゆががたたるる、女郎のまろと卵の四角 君きみが射いすすく
あは 晦くわい日にち子こ月げつががででるる 君きみが射いすすく
 的てき場ばでで足あしババいいんん尺しゃく二にをを射いんんかかささるる、君の寝姿を窓より見る
ハ 牡丹ぼたん芍薬しゃくやく百合はくげ華はな

またあつらひ付ま〜といふハ句の下此詞を次の句乃上
 ねまて長ながくくををままぎぎ露つゆががたたるる、上畧六ろくのの口くちををののれれとと、一首しゆ
 花はな世よハハああまましし、あまけけれれ四し郎らう高たか綱なづなでで、つふふててくく繩なづな十じゆ文字ぶんじ十
 文字ぶんじ此こゝ情なさけ子こ日ひししややああれれふふ、あれれとと百ひゃくままりりくく日ひししやや九く十じゆ九くままてて、
 九くままててあありりたるる中ちゆうじじややのの、あのの葵あひ花はな三さん葉はつ山さん、下畧ああつつふふ
 あり、あれれ唐たう山さんいいふふ粘ねん頭とう續つづ尾びのの戯たがいいととあありり趣おもむきあり、あれれとと
 の類るいををこころろハハ自おの體み裁さいありりとといいふふ一いつすすくく地ち口くちハハ詞しのの縁えん
 此こゝああれれぬぬをを巧たくま〜、初のの文ぶん字じれれ同どう字じあありりぬぬをを〜とす
 一いつ、あつつふふてて聞きたるる中ちゆうああつつくく巧たくま子こ地ち口くちハハ一いつ二にををいいふふ、

繪馬えまああけけががんん不ふとときき 胡麻ごまああけけ鷹たかももとときき

梅ハコトシテ入醋とヤマス 夢子見テヤスといとヤマス

雪見ふ出たり三谷舟 一富士二鷹三茄子

年のヨリハ乃子白髪が見えろ 沖のそいふ白帆がええろ

玄關子席をあてためて口上をきく 林間燗酒焼紅葉

銅丸罈 渡部の綱 天上天下唯我獨尊

檢校けんを杖がたぐえん 娘ハ琴より三味のごと

鼓ハゆとり波の音

これの類猶ほまことあづか 地口と似て異なる語路とむらり

あり語路とのふを自然と語勢の通ひてそれとこゝろあり

九月朔日命ハをり 命を惜しおそめ久松ひろいよてせよ

清和の類を語路といひてむらりをりこそ語路の宗

匠此萬句合此會ありこそ語路まん卯といふが秀逸あり

ときたりむらりといふ中の中の詞を上下へこそ聞すとい

ひのりれり御祖師なるあり瓜此皮の餅

子叙迦 摩耶夫人をとりこのむらりれ一體子

おきさるのれ寝間へつらそらとをひひりける朝顔の華

ささのうもあざり

六卿橋

六卿橋を掛そりつれこそ定かふりのにえをねど小

田原記の永祿九年武田信玄小田原子人数少き隙をう

かひ、世のいよる方より小田原へ押寄るといふ條は、搦
焼落して甲州勢と通さる信玄品川の宇多河石見守
鈴木等を追散して六郷に搦落るは池上へうつとあり
この時搦と焼落すとのあれば北條家此盛りありし頃
掛そのいよる後長く舟よりありしが六郷
新搦とて慶長五年より近ごろに搦のありありそ
の事より快運上人の六郷搦修繕記といふものより見え
たり、さてあの後搦の事と見えしは羅山の丙辰紀行爲
峯に癸未紀行子あり、寛文延寶の道中記に類は、こ
ふこの搦あり、貞享の洪水不流止せしむる後、假搦

てあるあり、後かぐ舟渡しとありぬとぞ、

英一蝶女達磨の畫

畫工の英一蝶女世に名高き人あり、その事跡ハ書子記
たりも人口不傳やと、多六傳會の説あり、罪をうり
しとの由ハ龍溪小説附録にあり、その中や實小近し、そ
せよあまねく畫きしつとあり、女達磨といふハ一蝶がゆきと
見るとぞ、そのゆき新吉原中近江屋の抱子半太夫といふ
遊女ありしが、後子大傳馬町の商人へ縁つき、その家ハ
人とりまりて何れといふが、序に達磨の九年面
壁の事ありとあり、その半太夫ききて九年面壁の

坐禪を何ぞのことかあるらる女此身乃う二そ紋日
 の日此心づひ不晝夜又せとるて面壁子かをるよれ、
 達磨ハ九年日れハ苦界十年なるハ達磨より悟道者
 早くて笑ひるもそこのみさかハ英一蝶うきうてやうて半
 身此達磨を傾城の顔に繪きたるう世よまやうく扇
 を多葉移入柱ううかたうきて、女達磨とひるも市
 川相送うそ此畫の讚子をもさんう是ハ子さんハ誰と詞書
 して、九年母を粹よりどハあまうれとらふ句をけ
 るとも、俳人素外う手引ハ、九年何苦界十年を喜こらふと
 うふ祇堂う句あり因ハあまう、

觀音籤 關帝籤 福主靈籤

唐山ハ觀音堂ハ關帝廟子ハあれハ之餘ハ神佛
 づづれハ籤ありく各異なり、吾邦ハいハ慈覺大師
 の觀音籤を將來ありハあまうのめ、づづれハ神佛
 堂社ハたハ觀音籤をの用ハあまうハなるハ、唐山
 ハ關帝廟子ハ盛あまうハ、五雜組ハ天下神祠香火之
 盛莫過於關壯繆而威靈感應載諸傳記及耳目所
 見聞者皆灼有的據非幻也とハ、その廟子籤あり、
 關帝靈籤とハ、吾邦ハ信する人ハあまう、新室
 手簡子關帝籤を占ことええハ白石先生ハ信用ハ

たまをえいゆ、さてこの頃ある唐本の中より一ひきの籤文の
 てうとそ青雲堂にあり贈らるる福主とある福の神
 をとらるるけしむるに載す。

福主靈籤	
第八十五竿	大吉
占得清香四壁盈	緑楊枝上有黄鶯
紅蓼一幅連宵至	且去開門到處迎
解 意外之喜	從天而來
曰 孕男名就	寔曰快哉

竹帙

源氏物語は御經よりとらめ玉の軸らに表紙ちすの
 ざりゆとあるちのハ帙篋と書て細流抄小竹の篋子にあ
 たるふまき經をつむそのありとより、あれ帙篋は古
 物今もたれ世に遺り存するものあり、梅檀王院に載
 するもこれ已に古圖類後不載たり全形を伺ふに足
 今舶來れ唐本ハすく木綿帙の多一絹にて造
 るものあり、彼邦にも古代ハ竹帙を専用たりと見え
 て、天祿識餘に古人書卷外必有帙藏之如今裏祇
 之類白樂天嘗以文集留廬山草堂屢亡逸宋真宗
 命崇文院寫校包以斑竹帙近頃子京家王右丞書

一卷外以斑竹帙表之云是宋物如細簾其内襲以薄繒觀帙用巾旁可想也今大内藏黄庭内經墨蹟亦有蝦鬚草細簾裏之亦是宣和物也とあるを以て吾邦の古物と見て隋唐書帙此製也の言を以て

書を手跡と云 上大人

能書を手りてといふハ書を手といふを以て漢書郊祀志の師古註小手謂所書手跡とありハ今書と學字を以て習といふ俗語より王充論衡子文吏幼則筆墨手習といふことと吾邦も小兒書を習のをいふはと習といふ唐土にてハ上大人立乙己

化三千七十士尔小生八九子佳作仁可知礼也云
廿五字を以てしむる一猥談ふを以てしむる

魁星

新刻此書籍に鬼形を印すハ魁星といふ星は圖を以て唐土をいつてのころより初よりといふことハ詳あるを以て問の試ある時衆人に魁とて科第を取んと此吉兆也、魁星は圖を以てするもの、その圖ハ即魁字に謎あり、按ずる、倘湖樵書に世人奉魁星踢斗圖以為宜科名夫魁字乃鬼抱斗鬼之脚右轉如踢北斗然所謂魁星踢斗者不過藏一魁字以為得魁之兆耳とあり、又

うの鬼形れ^{きまぎ}に^ひ左^{ひだり}に^{みぎ}筆^{ふで}と^と把^とり^と右^{みぎ}に^{ひだり}分銅^{ぶんどう}を^も持^もつ^の圖^ずあ
 り^もこれ^もも^も急^ああ^とと^とも^も、^サ堯^{ぎょう}山^{さん}堂^{どう}外^{がい}紀^き子^し天^{てん}順^{じゆん}癸^み未^み崑^{こん}
 山^{さん}陸^{りく}文^{ぶん}量^{りやう}會^{かい}試^し寓^う京^{きやう}邸^{てい}戲^ぎ為^な魁^{かい}星^{せい}圖^ず左^{ひだり}手^て握^{にぎ}筆^{ふで}一^{いつ}枝^し
 右^{みぎ}手^て握^{にぎ}鏃^{さく}一^{いつ}鏃^{さく}取^と必^{かならず}定^ま意^い文^{ぶん}量^{りやう}題^{だい}其^{その}上^{うへ}云^い天^{てん}門^{もん}之^の下^{した}
 有^あ鬼^き踢^{てき}斗^と癸^み未^み之^の魁^{かい}必^{かならず}定^ま入^い手^てと^と見^みえ^とり^りく^く故^{ゆゑ}を
 り^りて^て今^{いま}も^も吾^{われ}邦^{くに}あ^まく^くと^と專^{せん}書^{しよ}籍^{せき}の^の圖^ずを^を印^{いん}す^すと^と
 ぞ^ぞ抑^{おさ}め^めら^らせ^せて^て友^{とも}人^{ひと}慧^{えい}充^{ちゆう}と^とい^いふ^ふ法^{ほふ}師^しに^に紺^{こん}紙^し小^{せう}金^{こん}泥^{でい}の
 て^て急^ああ^とと^と唐^{たう}畫^がの^の魁^{かい}星^{せい}の^の圖^ずを^をめ^めて^てり^り、^づその^の圖^ず堯^{ぎょう}山^{さん}堂^{どう}外^{がい}
 紀^き子^しと^とら^らり^りの^のあ^あつ^つを^をり^りく^く今^{いま}左^{ひだり}に^に載^のす^す



字謎

大覺禪師即心是佛頌子云有節不干竹三星繞月宮一
 人居日下弗與衆人同節の竹冠と除け、則即の字か
 星れ如く一點して下小半月を背け心とつ字
 なり日下と書く下に一の人とつ字を背けは是の字
 外、弗と人と同すれば佛れ字あり、これ字謎の詩な
 り、四箇口盡皆方十字在中央不得作田字道不得
 作器字、これハ詩子ありて字謎あり、解て圖字の謎と
 せり、予らて和漢の字謎雜合詩隱語 古歌子、西、これハ木毎子
 の類と集りて看る、猜彙と名づく
 華ぞ咲き、いづれを梅とよきてを、まゝとらへ、梅、

とらりて詠あり、吹々に秋れ草木の志を、まゝハむ、
 山風を嵐とららんといふ、嵐字を、ららんよめる、如く、近
 來の噴浄瑠璃の文句も、百日曾我、近松門左子、言、まむ
 や、系れとくよとらぬ下心といふ、戀といふ字の謎あり、
 江戸節夜の編笠子、山、も松れ、これ髪といふも、山、松、ま
 だれ、いふ訓、あまを、如く、今の童謡子、松といふ字、あ
 木邊、小公よ、ま、ま、子、を、あ、れ、き、け、と、い、ふ、ま、ま、と、雅
 俗の分ハ自殊ありと、ま、ま、あ、い、ま、ま、ハ、絶、て、相、似、と、
 いふ、ま、ま、

あま

おぞくといふ戯たはぶはうきとみく、拾遺和歌集しゆいわかしふ子おぞ
物語ものがたり一々ところろあてと端書はたがきある好忠こうちゆうの言ふ、

つらとへえもいさうれむらび松まつ子とせやもたれ
とまふきととええさうり、かの徒然草たれげぐさに、資季すけすま大納言だいなごん入道いんどう
うやまことえたる人具ひともの氏うぢ宰相さうしやう中将ちゆうじやう子達たつて、とぬの問とひ志
んぞの事ことあまどとぬるとも答こたへへやさうらんやといわれ
ちかくしきとへかきともまぬびたふ竹たけバ尋たづね中ちゆう中ちゆうもか
一、何なにとなきさるごととあそ問とひ志しあめと中ちゆうさきて、具も
氏うぢをさふ死しより聞きあひたふれとそれさうあぬとたふり
馬うまのまろやうきうまのさうあめとたふれ入いりたふれんたうや

中ちゆうとへいさうあつ意いふたふ承うけらんたふと中ちゆうさきさるふ大納だいなごん
言入道いんどうをことつらうてまゆふありて所課しよかいり免めんくせ
られたりとぞとつづを、徒然草たれげぐさ子註釋ちゆうせきれ書しよも多おほうれ
ど、此馬こゝうまのまろのあぞくと解とたさるたふあや南畝なんあ翁おきな乃
筆記ひらきふ真字まじ徒然草たれげぐさ子馬うま之の吉了きちりやう狐きつね之の尾おし之中ちゆう四入しに衢かど
連動れんどうとらきて吉了きちりやうと秦吉了しんきちりやうといふたふいさあぶ死し南なん
郭かくの大東たいとう世語せいごもや馬うま吃糧くじやう狐きつね丘かみ四入しに九連くわん等どうとりま保たへ
己おのれ一檢技いっけんぎハ馬うま吉きち驅く狐きつね丘かみ四入しに九連くわん倒たふあり、山海經せんかいけい子大封だいてう
國くに小文馬せうぶんばあり、縞身こうしん朱鬣しゆれ名なづけく吉きち驅くとつふ駿馬しゆんばも、
狐きつねの丘かみ子つまづきてたふまんたうと倒たふるをありと云いま

先ありとやとあり、これあり謎の字面はあつるものなり
 その意まで此解子及をす、閑田耕筆小解たるを併ぐ
 明解といふべし、拍原尾全が記せるものより見るに、
 馬此きりやうきりよのそり中なるをいり、
 といふものとき、
 外うて負已ざい、
 ひりりや、
 きりふれをうかうなる色入里と、
 をのこり、
 らりたるあり、

字をさう、
 くいひ、
 びぐり、
 これと全、
 空言よ、
 同例、
 つと、
 後奈良院御撰何曾といふ書あり、
 その、

ふいこぞさいつくえりて七月半と、なるとやん雀が利を持
かぐ目とぬれさまでも子をバ羽に下りありを硯をこころ
中てんだうして月かぐすまを、葛葛あきつてハ何とこ
糸うとたまごと解る類たこのサむきぬり、今見戯子い
つぐ中やも巧拙あり、破る障子とけて冬の鶯とそく心ハ
そくをまつ、こころ三味線とやけて、男此氣性とそく心ハひく
子ひくれぬ、おとやうのそあま、阿れど、鄙俚あまりのそくいと
多し

忍びす紙

紙の隅に裁切のそくたるを俗子忍びす紙とそく、そハ十

臘ろうハいつく此神かみも、こ出雲國いづものくにへ行たまふより世よふいひ
つえく、この月つきを神無月かみなしつきといひ、出雲國いづものくにあてハ神在月かみありつきとい
つあどこととさもいふ、惠比須講えびす講ハこの月つき子すのなとハ
忍びす神かみちうりハ出雲子いづも行たまひハ、これたのそく
いふとそくあて、忍びす紙かみとそく、これるも謎語めいごを
の類たぐひも、饅頭まんじゅうをさるる色子を、馬うまの看板えんばんをいふ、地ちハ、
あつち中なかつちとそく、意湯屋いとうやの入口いりぐち子、矢やを出せ、ハ、射やれとそく
こころあつとそく、今いまも焼芋やきいもる家いえの行燈あんどう子、八里半はちりはんとそく、
ハ、その味あじをひのろり子、ちうりとそく、十三里じゅうさんりとそく、ハ、
栗栗、誰たれもあはれとそく、とそく、

栗 九里四

實語教 童子教

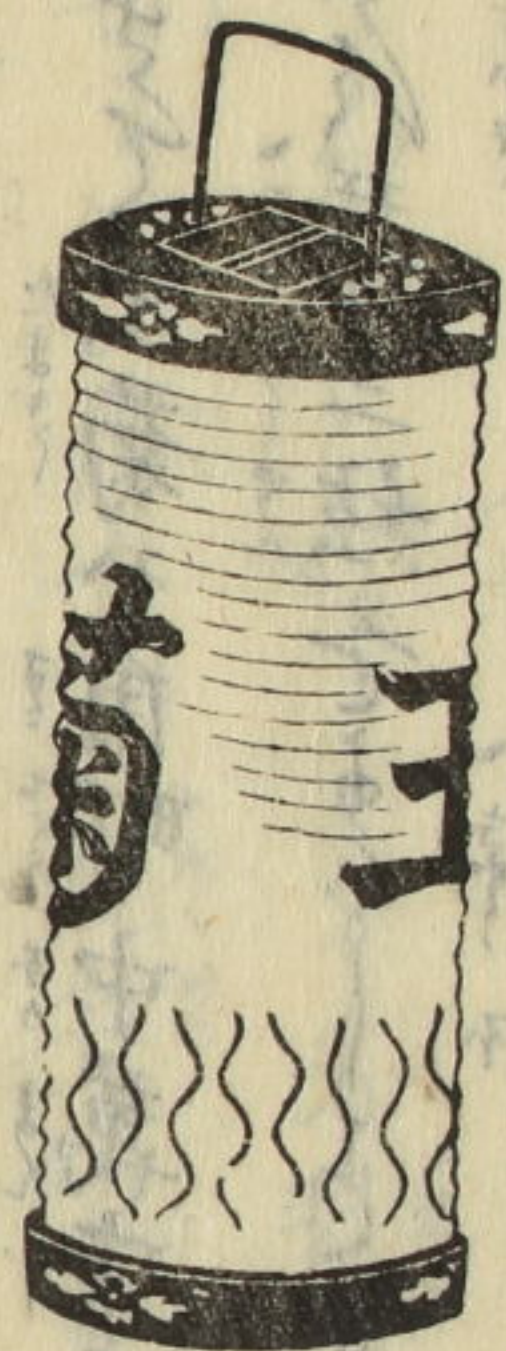
實語教童子教の二書ハ民間より小児の手に讀まざり
子ありしむとむりしもの習俗あり、實語教ハ弘法大師
の作と世に傳ふれど、託名に書あることハ辨ずりまざりも
此書不文ありしを後世のゆゑにあり、康頼が寶
物集に玉ハ寶あることすゑの世に元夫ハ玉と寶とも志
るべし、ことふさぐくやうをも志らぬ弘法大師ハ玉こそ
されバ光あり、ひかりをさと石瓦とす、とぞ仰られしとあり、
無住の雜談集にあり、人實語教を誦し、をよむるを
童子教ハ東大寺の安然和尚の作あり、三國傳記に

然和尚の鞠賣れ子ハ小文を作り童子教と名づけ教
たまふとあり、出法師落書といふ永享のころに弓の書に
童子教朗詠あるを、へりしとあり、と見え、

新吉原燈籠 玉菊小傳


新吉原にて七月燈籠をとり、はりと玉菊といふ遊女
の追善れ、こゝより起りて今猶年をおひて善美、越盡、盛
あり、さて玉菊ハ角町中萬字屋の抱あり、ころをえ、や
し、く、琴三絃をよみ、し、河東節の浄瑠璃を好て
つねに彈、く、し、享保十一年三月廿九日二十五歳にて身
まうりし、が、その三周忌れ追善として仲の町に茶屋の軒ど

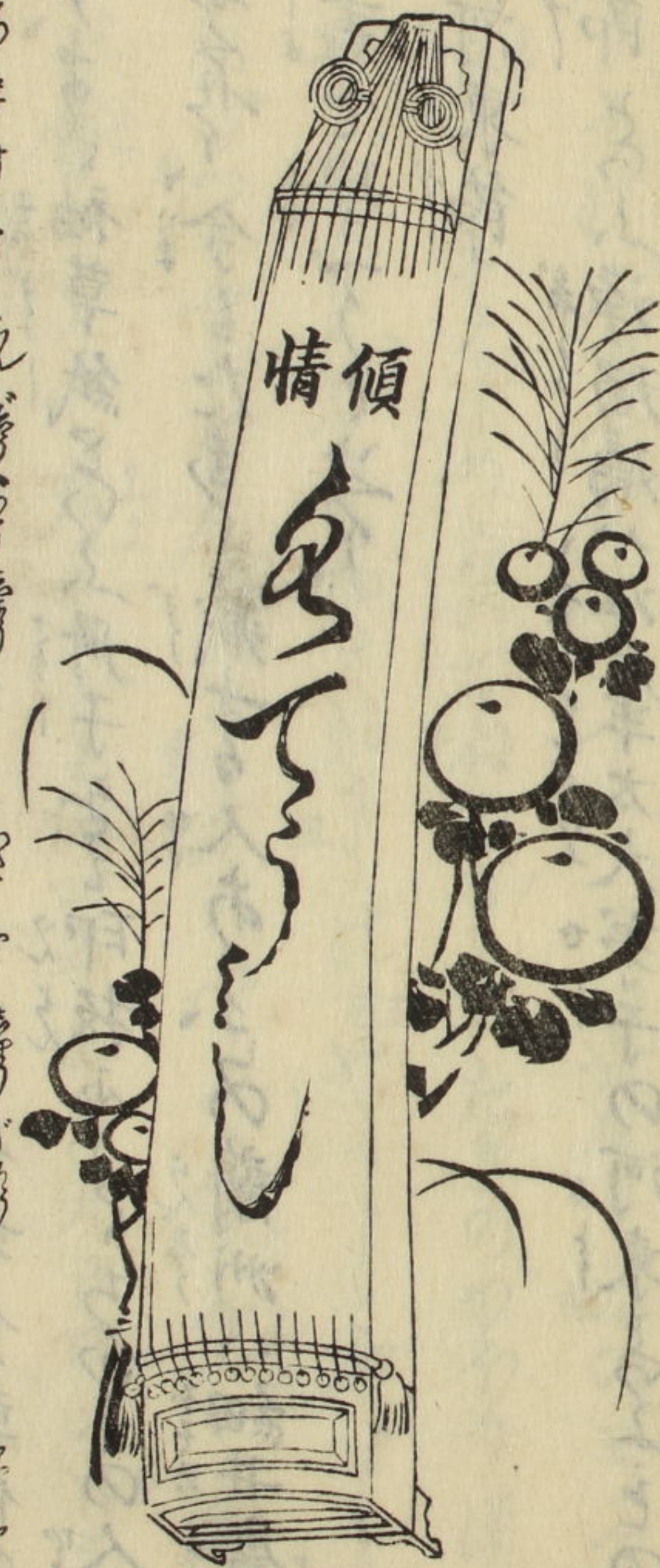
子箱挑灯をいづたりとを



子箱挑灯此圖青接
雑話子元えたり

それ翌年よりまう二燈籠おまのまのり燈籠をいづたりとを
そのつね年を追て潤色し今ハ華麗とまのむるを
まのりつね年を追て潤色し今ハ華麗とまのむるを
人口子膾炙せりこの句ハ明和のころ東條萬立が聞句にて
俳諧師子出たり


 江戸太夫 河太
 夕太
 三味線 山彦源四郎 琴 上村夕彦
 山彦東韻 山彦字高門



その頂十寸見蘭洲通稱ハつる葛屋庄次郎といふ茶屋
のあふ俳諧師岩本乾什子あつて水調子といふ河

東節の淨瑠璃をつらうせ文句、蘭洲自書表紙の繪ハ
中村少長七三郎筆、竹婦人作とあり、竹婦人、乾什の
號あり、袖草紙といふ冊子を印板少くちの人の
人子おる、今もたましく藏する人あり、蘭洲ハ細井廣
澤子書を學ぶと云ふ、

河東節

河東節といふ淨瑠璃ハ江戸半太夫弟子の河東といふとの、
享保中より一流をたうして遂に一派の祖とあり、此
河東といふハ品川町あり、天満屋市十郎が子まゝ加
藤藤十郎といひ、河東ハその俳名あり、紋ハ丸の内子三ツ引

をを畧して 如此すと云ふ、享保三年半太夫と河東と



師弟の中あり、別子一家此風をたう出た、
次此年享保四年あり、その春松の内といふ淨瑠璃を作
りたり、此文句を徵とす、二日ハ茶屋子ゐる日あり、
三日ハ客のききあはれてぬの日と一たきあ、ゆかりほの
るく地、きき君がちびきれ、此日やうとやいふと
がゆひ、ソラヤとなん、中畧といふあつて裳露とあり、
ゆて吉曆子よりて考ふる、享保四年正月元日戌の日あり、
七日までの十二支をあらわす、ハ北たるものあり、さて河
東節の唱歌ハ有名此人の作文あり、おきかき鳥とい

ふつゝ鳥や蘭洲五十回の追善安永六年子山岡明阿の
作形より南畝翁此麓の壁ふ又ゆすゝ繪といふ唱よ
木辻の遊女此名よせみゝ柳里恭の作と自撰の獨寐とい
ふ隨筆子よりまゝ十寸見と名乗るとハ真澄鏡此より
あゝいさゝもたつたかろつとつとつとつとつとつとつ又
その唱よ此書ハ鳥鳥集鳥鳥萬葉集おと鳥鳥をよ
題すハ鳥鳥の息長河とつとつ詞の縁よりてかの節
とつとつとつ息あひれいとあきまち子とつ此題號ありと
也

男色

うげま

男色ハもと天理少むる邪淫も在家出家の分なく
とつとつとつ佛説子男色と誠むことすて法華
經正法念經十不善業道經五戒相經造像功德經
沙彌十戒儀則經僧護經阿含暮抄四分律五分律
僧祇律有部律十誦律など猶五百問論瑜伽論も
見えれと今ハ大くそのあぐハ天竺ハ佛在世のち
ク先より男色の盛なりとあひやるべしさて唐土
も比頑童の訓尚書小ハえてよりあのみそれ寵さ
んなりとつとつ孩餘叢考子つまびら子とつ吾邦のと
いさつとつとつ書子昔よりのとを大く輯めとつとつ

今の男色此童ハゆと俳優とお子しく近きこそあまでもその
 風ありしがそをわけまよぶこといふるゆゑをたのびて
 ずあつふあつ時友人菊庭子語此次いひ出さればおねて
 嬉遊笑覽の中ふあつて替りて抄書して替りられり
 うけまゝ京師宮川町大坂八道頓堀をど猶ありやあつて
 人倫訓蒙圖彙子狂言役者男子を遊女屋此女をわあ
 るどく子抱へ替りて藝を志しれり十四五歳子あれば
 それ一不色づわり芝居へ出―藝あく名ををれば我門
 口子大筆小誰がやど名字をあつて夜ハ戸口よりけ行
 燈子名を書付おけりいまも舞臺へ出ぬはうけまとい

ふ他國越めを飛子とつて又えり心化粧といふ
 冊子も今時男子を野郎の新部子子うるといふ新部
 子とハ歌舞妓事始子幼少あつて藝の至らざるをいふとそ
 一ことハ薩州の方言子てこそ知音をいふて義兄弟と
 あつてあり其角り風流つて草子野郎うけまいつて
 大なるよりぬれハ曾我小栗あつて武道ハ志田哀あつて
 志んともすた川又女郎の名を付たるをいふ
 ありあつてあつてのり興するも此あり西鶴置土屋子花
 山藤と助松風琴之通雪山松之助あつてなうけまの名
 あり一代男ふやらうりてあそびハ散るる花のりて子狼

のねてあつるが如く願城におぼむ入ける月の前提灯
のあき心ぞうとあんとありあまほよふてありはくげま
狂言役者のいまご舞臺へいでずうげにおくちちとつと
ろあぶ吉原に遊女の引こををいふお孝ころろ
そありとあぶ

香の圖

香の圖とのふりのそれ道不たつるいふ何の故
る圖ありとつまあふ人も少くこれり香をま
とこの圖ありまづ常目あれ源氏香のこをいふ香
をまは取初よりその圖ありは五柱に香を試あ

えたる次第をうきあすよ自然とそれ圖いでるあり圖
の作りやうハ大概左のど源氏香ハ香五柱あり五柱の内
一此香五色ニの香五色三の香五色四の香五色五の香五
色あはせて二十五色をあらべていづれありともそれ内五
包より出る香本より一色づたまき出す假令ハ一二三四五
とあかりたる香とまけハ如此圖を名乗紙子書一四
うり二三五同香ハ如此書一三同香少く二四五ありた
るとまけハ如此書一三同香二四同香五ありたるとま
けハ如此書一三同香少く二四五同香とまけハ如此
書あり餘ハこもよあざりへくあぶくこれ如くき

多ありし圖をつるれば自然と五十二の圖にぞなるなり、

一三三

朱硯

白石先生の佐久間洞岩子贈られし手簡子朱硯は白き、
石は赤くつ子くみとあり、これより予年ごろ白石の硯を
得て朱硯にせまわし、妙あり、ある時東文齋の肥後の
白島石に小硯を携へ來たり、よりて購ひ得てこれを試
し、實に朱色を敷するに、常の硯よりよきなり、一日考槃餘
事を閱す、小朱研亦得、舊石者方妙、或用白端亦可
と、うらなれば、唐土に人をやく己に朱研、白端を用ひ、此
説あり、

圓轉圖

開口如咲
世上看冷
暖
閉口似怒
人面逐高
低



一三三

右圖轉圖ハ大田全齋うろく贈らうろくあうあう人ハ
古鏡の背文あうんとうろく

地震少て晴雨を知り歌

世子地震あう晴雨を知り歌とてい

九八やまひ五七の雨小四日てう六八あれハ風とあう

あのかやまひとつるハ疾病のこころあう空れ曇を

うろくそのあハ唐土の地震あて晴雨を知り訣子日風疾

雨と順子う時ハあらうあう一日明六晝風五七疾四暮六

雨九夜五二ハ澄井春海の傳來あう輪池翁のそ子

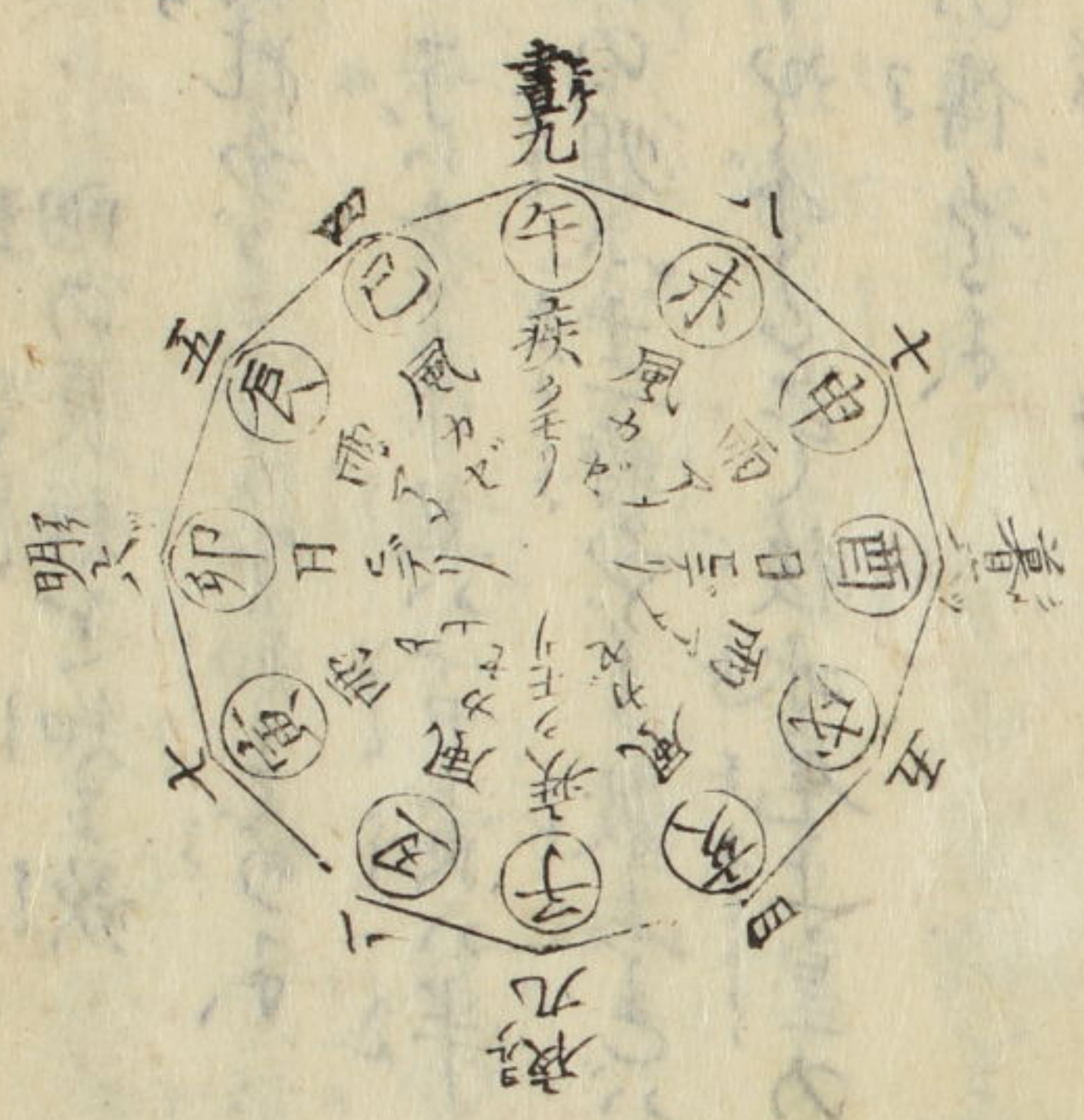
うろくき再押りあの地震れあの時取あやまらうあ

日てうあうハ叶をそのハ明暮の六と晝夜九とあ

堅横して敷一あう四八と五七と六二つて堅横の間を

うろく猫れ目う時刻を知り歌少ても催せあう

今日やすうん為ふその圖をつらうてあう



猫の眼ふて時を知歌子

午線卯酉圓寅申巳

亥銀杏辰戌丑未側

文銭と物類相感志

よんえう

雨の長短を知る歌

雨此あがきつらとぞ知るあり、

子ハなぐり一廿一日寅ハ半卯ハ一時とらぬくある處

あの頃小土時あきり數少まばあきり、死のあきり

しやすそて後水尾上皇の御製小ま直をたまひと

の傳あるま、

曇るあ雨とまあよありやらばちとあきり天氣あきり

曇る子ハ長雨をいふありやすハ日を経る雨ありちちち、半日

寅午天氣天氣をいふありとありあきりハ云風をいふあり

あきあきりあり

正五九月

正五九月ハ三齋月三長月まハ一切諸佛神通月三神變

月をいひて専佛事をあきりま月あり、優婆塞戒經一

字頂輪王經ハ出たり法苑珠林ハ提渭經を引く具ハ

明也釋氏要覽ハ智論を引けども論中ハ文あり唐の

高祖佛教を信じたまふ由多武徳二年正月甲子ハ

詔ハ自今正月五月九月不行死刑禁屠殺と唐書

ハ出たりこの餘風末の時ある遺りて正五九月小輩を

食すことと禁すより雲蘇漫抄ハ又正月五

月九月ハ杜門謝客延縮流作佛事ハ唐ハ遺制あり

とも老學菴筆記らうがくあんきに云く、吾邦わがくにはもとより、隨唐ずいとうの制度せいどを
そのまゝ受たつたものなれば、佛法ぶつぽうの行ぎやうもとも亦盛さかむ
は、正五九月せいごくげつを何事なにごとも忘れて屠殺ととくを禁きんずるべからず、彼邦あつちに
習俗しよぶくより來きたるものなり、

狐狸きりねの書畫しよが

予よらうて狐狸きりねにききしと云く、書畫しよがをたれりて、
か狐狸きりねの書畫しよがも畫えふも、
紀事きし、藍田らんてん文集ぶんしゆに見え、
あつて予よも藏たくわふ、
の見えしとあり、白雲はくうん子しといふ狸たぬきの畫えも、
蓋たふ鶴つる此圖このず寫かき

山樓さんろう晁せうの藏たくわあり、
載たくわせられ、
此書畫このしよがハ縮寫しゆくしやうして
耽奇漫録たんきまんろく中ちゆうに

井いとららるる
か

わんてん
あか
しん
し

一入心...
 何...
 此...
 此...

一色

一色

一色

一日佐玄龍與阿弟橋洞游於戶田光賢亭主人語
 于客云濃州席田郡春近村者我采邑也有邑長井
 上氏兄弟貞享丙寅年井上與三次郎家有奇事不
 可牧舉也野干相馴友善或時欲行于他告別於井上
 氏井上氏亦愛其情而賚物錢於孤穴前野干謝之
 以書其書在光賢之家坐客相共見之筆勢文語不
 異于人或引經文而云見此文則不可謂有孤疑者

平光賢欲録其事使佐玄龍筆焉予在坐應其責而誌其後而已于時元祿三年庚子之秋九月穀旦右子載する書翰八野干坊正元といふ老狐の手跡あり其狐つねに老僧の容ありて井上氏此れを以て時物語にも來りゆゑ不書翰も多しありといふと聞くなくもまづこゝの一通の遺物といひ來由此紀事ハ記者あるれど橋洞の文ありて原徳齋のおつれ友といふ筆記中にもまづいたるをうけて摹寫しおたりおと下野國宇都宮あり東廬山成高寺といふ子狐のおやより證文ありつれ頃子うあゝんといふ寺に覺道といふ僧子狐のとりつていふ其

寺の住持と云丹誠をこゝして祈禱しなむバ彼狐一通の證文をきて罪を謝し退きうとやそのあやまる證文を今猶寺に傳つるとぞ

鯨帯

今ハ裏表をわける帯と鯨帯と云ふはこれハひと黒天鶴絨子白綿子を合せけたる帯明和安永のころ專を争つたるそのうゝ總て白地子黒色をとり合すりゆゑ鯨帯の名を起すつるありあはむハ両面帯又ハ晝夜帯をいふといふや明和頃の俳書名物鑑子両面帯といふ題にて夜晝の帯もつけつ閏此月 風船と云ふ句あり猶やうハ天和の印本題抹一

句く子こ鹽吹しほふきやあせのくらららままれれ鯨帶くじらおびとと句くあり又また延享えんきやう廿に九く
 仙せんのの附合ひきあひひもも阿あ比ひ川がわ帶おびとと今いまハハササシシととららままるるままるるハハババ
 少すくししるる名目なめいととササシシととららままるるハハババ

二九

本相平

三養雜記卷一

本相平

三養雜記卷二目錄

小歌こたが
 隆達節りゆうたつせつ
 武藏野盃むさしののさかき
 福泉ふくせん
 對酌奇事たいあやくきじ
 聲色こゑいろ
 とうくたりり
 鳴ハ瀧なるたき北水きたみづ
 わささつ

大盡舞だいじんまい
 壬生狂言にげまきやうげん
 隱語いんご北きた盃さかき銘めい
 孽水じやくすい
 酒席しゆせきのの遊あそ戯び
 女藝者によげしや
 ちりやたらり
 ありありままららややどどんんととや
 南方みなみかた海うみ島しま風俗ふうぞく

本相平

天狗銅印

口碑不傳々和歌

ふまいとり

つげ猫

七里らつそい

麻姑手

般若假面

ひかり まふ

蚊帳

わとこを失ふ

よとやまの物語

窮冬

せいたる畠

初雪や犬比足踏梅の華

あふこ

四萬六千日

三養雜記卷二

小歌

榮華物語玉村まきの巻子川そい柳風存ハととと
 と根わつもーといふ唄とあり後世のあけ節の唱
 小や似たり松の葉子載す小歌の中子琉球組とふハ
 水禄年中子琉球國より三線とさうーころに組やゆゑ
 子志り名づけたるもの少く小歌のとふやまきものありこま
 小次て鳥組腰組不祥組飛彈組忍組浮世組とふ三線の
 組なりこれ七曲を奉曲とさう琴の組ハゆゑ三線に組
 ありて作りゆゑのありむうれ小言を集めたるゆゑ

ハ松の葉續松の葉松の落葉松竹梅大麻紙鳶糸竹初心
集小歌想まきりかどとぞありあり、そのとと此曲節ハいよわ
せん今も河東節の中地ろ長唄を舟の禿のわふやうや
とふ一節ふとハすむ松の葉子とをえさう今うたふ節むり
の名ころまや、

大盡舞

大盡舞といふ小文ハ寶永正徳のところ舞間小名と得る
俳優の中村吉兵衛といふとれれ作あり、その吉兵衛ハ小文
の上手あるよし吉原つれ草小文をえさう吉原のつれ
小文ハ今残りたる僅子この大盡舞のこれハこれとおのが

さかしくさむつて正存おれまハ文句のつきまこころえぬ
ともいと多うり、志ろを南畝翁の原雷源雷 原武大夫とて
三味線の名ありつえたりといふ大盡舞の唱方、蘇此塵子とえさう今とふ
と六定て異同あぐ、まて手ハ傳り、ねと吉原ハやまこ小
子、

道のやうに此さむと柳風子あれてどちへなびこおも
やこれらのうへおびこよめ、

これハ新吉原のけしころれおあり、ま

くろ山谷の草やなれと君がすまうと押入ハよーや、玉乃
其まわろりぞ、さうよその名もあもいとよぬ、うーあやま、

おらふひやふか名のたつみ

洞房語園どうぼうごゑんに見えり、英一蝶作の小言こごん、

まづちあつんで二すゑのうらむ今戸橋土平の編あきなが、

うらの夕ゆふぐれあひとありはあつぬむら、此細布ちほふ、

あきくふもきさんたざいふをきまよさ、

隆達節

むらゝ隆達たかみちといふ法師ほうしのこゝひこゝろ、小言こごんにそのうらむあまねく

行いちれて唄うたひつゝを世よに隆達節たかみちぶしといふ糸竹初全集に

載のりすげ笠がさがと人ひとのあゝとある、

やぶれ菅笠すげがさやんやあ緒おぐきれて、いのおえへさらりき

せげえいやんさやあさんさ機もせす、

とあり、予よろゝ隆達たかみち自筆じひつの小言こごん一冊いちさふを藏たくわへ、此奥書

文禄三年九月日自菴隆達もんろく三年九月日自菴隆達とあり、華押あり、元禄の書目

小隆達こたかみちの小言こごん二卷にまゝとあり、印本あり、元禄

そのうらむ隆達節たかみちぶしのをあり、証ハ恨うらみ介まといふ草子くさこ、此書は

夏なつれごろ、二の盃さかづきといふ、此介まひらるらればあやめどのうらむ

びんごのおん聲こゑよて當世あたよをあらわるらるらたつふらいとおわらしく

てぎん、たまひらるらハといふ、まとむらしく、物語に百五

六十年ろくじゅうねん以前いぜんをうたふとをどまり、隆達といふ遊民の

おとけ坊主おとけぼうずあり、うたふを作らせるら、その時ときのうたふをす

小里うたうとつゝ聲こゑのまき入いれ拍子ひょうしのまきたる坊主ぼうずの諸人しよじん
ありあがりこれとうたひぬ者ものいかにとありてもそれとあり
流行はやりおひゆるぐ、その隆達りゅうたつが傳でん八堺はつまい鑑かん高たか三隆さんりゅう達だつハハ
日蓮宗にっぜんしゅう當津あつ顯本寺けんほんじの寺内じうち住す故ゆゑありて還俗えんぞく高たか
三氏さんし北家きたけ子こ往まぎて藥種やくしゆと高たか山やま年としをつゝ小歌こた北節きたせつを一流いちりゅう
謳うたひより世俗せきぞく隆達りゅうたつ節せつとと謳うたひ賞翫しょうくわんすとあり又攝陽せつやう
羣談ぐんたん國華こくわ萬葉記まんやふきもこの僧そうがとてんを

壬生狂言

京師きやうし北壬生きたにぶの地藏堂ぢざうだうあり毎年まいねん三月さんげつ子こ念佛ねんぶつ躍あつあり鰯いわし口くち
と打うちて拍子ひょうしをとりその拍子ひょうし子こありせて無言むげんありてつゝの

所作しよさくあり世よ子こ壬生にぶ狂言きやうげんとつゝ華洛わらく細見さいけん圖ず子こ壬生にぶ子こ念ねん
佛ぶつ躍あつとて躍あつ北きた先まき子こありす猿さるの綱なわよりをすつゝ京師きやうし
の名所めいしよをあらしたる繪本えほん子こ壬生にぶ北きた念佛ねんぶつ躍あつ子こハ大方おほひなた猿さるの綱なわ
たりをあらたり蓑かさ絨輪じゆりんの句く子こ賊ぞくたつて念佛ねんぶつ子こ壬生にぶも猿さるむら
りともつゝその躍あつ子こ称宜山せうぎやま伏ふし紅葉もみぢ狩かり餓鬼がき相撲すまゐ座頭ざとうの川渡かゝわたり桶おけ
取とりをとりありその桶取おけとりの躍あつを小舟こぶね子こ作りて寛政かんせいのむら
先京攝せんきやうせつの間まありてもつゝをとりたりとありそれあり
さげぬる水みづもあらる紫むらさきあろ月つきげをとりきさうら髪かみ
あひよる人の常陸ひらち帯結おびむすびとめたきこころねをあらぬ姿すがたの
をとりの手てちぎりおひせて古君ふるきみのうらを汲くみうをけり

うらみをくむるをけさるよ。

おけさりの雑言



右子載る捕取の圖ハ壬生在言此繪本より一節を摹寫す。

武藏野盃 酒を戒むる隱語の盃銘

吾吟我集此石田未得の狂歌子。

盃の名ふかれたる武藏野子富士をたぐて蓬萊此臺

まゝ吉原伊勢物語もこゝに坐りや上戸ありとく大盃を出

さんとす男びびく。

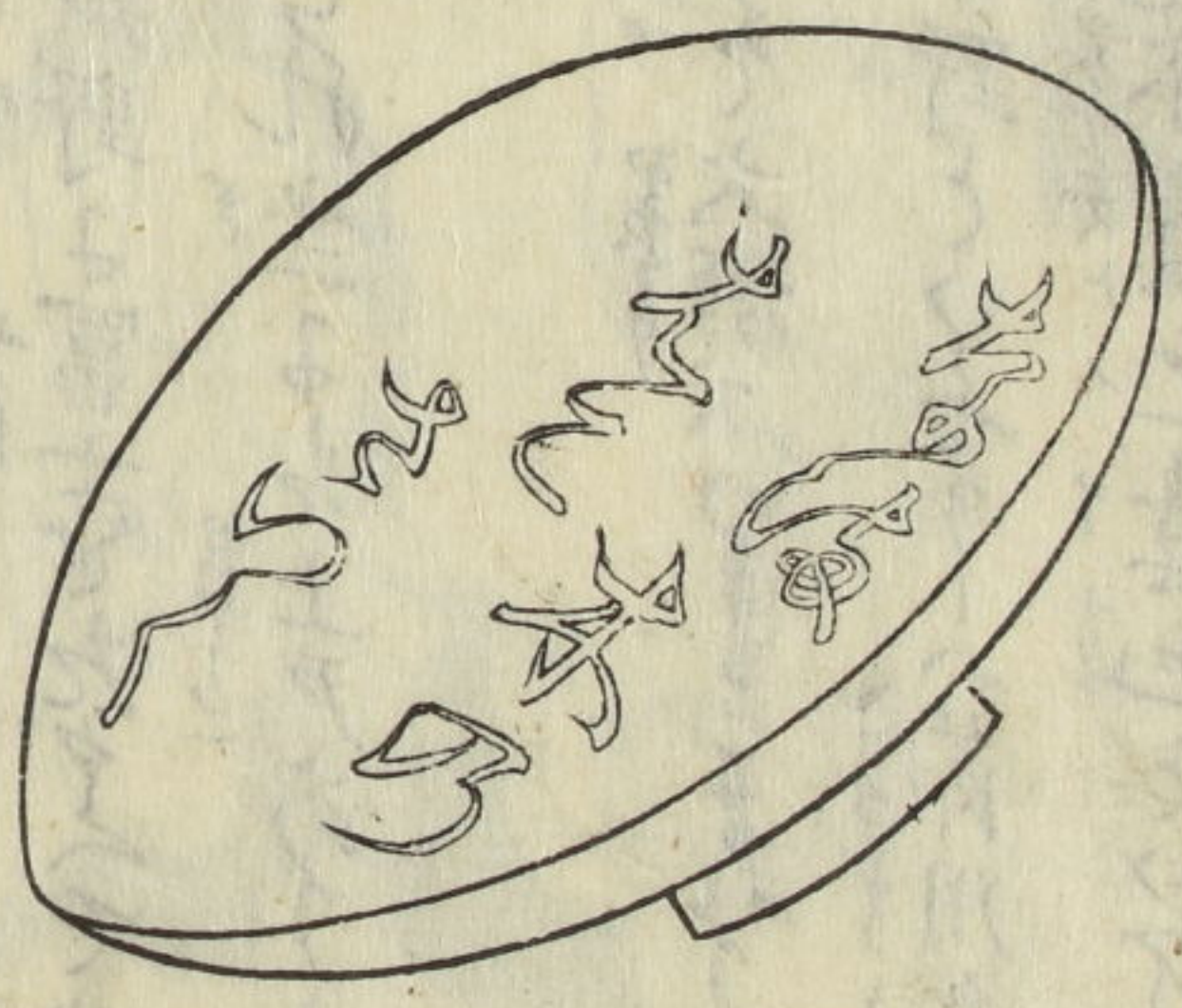
おき野をふふをか出さる大酒ふつまもこゝにけりこまもさる

こゝにるる大盃をむき野といふやハ節用集大全子酒盃

大者曰武藏野也言野見不盡之意也とよりそハ酒のむす

くて飲つるれぬを武藏野れさるも廣々ハ野の見盡され

ぬとよ子ひみりあり又筑紫ゆる人のゆとよりあり
 られざる盃此銘子、



ある孟子くこれ如く書つけたるありとハ謎のそんどのあり
 永祿天正のころとをそと世よりそを申し酒をいましめ
 語より工入此箱を造るふすそゆねを正しくつくりたる

も生木をそつらとバあひ口たふれありされバその大盃ま
 飲ときハ心正き人おも口れたるをたひくありもれぞうと
 のいよめありしつひおとせり、

禍泉 薬水

古人酒をいましめて狂水と名づるそハ人の知るところを
 づしうしん、清異録子、置之餅中酒也酌于盃注于
 腸善惡喜怒交矣禍福得失岐矣倘夫性昏志亂膽
 脹身狂平日不敢為者為之平日不容為者為之言
 騰煙焰事墮穽機是豈聖人賢人乎一言蔽之曰禍
 泉而已とそりまそ六諭衍義子凡人未吃酒時就是

兇惡的人也還有些顧忌只那兩鍾藥水下肚就是
天不怕地不怕大呼小叫胡行亂作一切瀾禍行兇
的事都做將出來所以貪酒之人最易壞事とちんえ
たり、この禍泉藥水の異名免つらうなまはあふあふ
酒は禍失あると佛家此戒行らうもさうれり、尚書は酒
誥を載せて只はこまを戒しむされどあふあふ酒を飲
み、きとまはあふた、怠を酒ふるゆゑなうすや、まこと
百禮是子とまはまり千失も亦これありおとまり只酒ハ酔ハ
くして亂れ、樂をくしく溺れま、まをや、

對酌奇事

天保二年のころや、讚岐國高松の津高屋周藏といふもの
あり、生をえさる大酒なれども常は八人あつて肴をもちけ
對酌すれどもいざ飲まんといふときハ玄米子生鹽を肴と
て飲むるとも、その數量はさうとふをさるべし、ある時ハ
周藏が檀那寺へ日蓮宗の僧來りて、さうやう、日ハ肥後此
熊本の者あつたり、傳へてきたり、この地ハ津高
屋周藏といふ人玄米子生鹽を肴とて大酒せらるもの
より、き及ぶ、いふやうふいり願は、我らこれ周藏と
の逢ひ、酒を飲らるべし、試た、さうさ、いひその周藏
ハ日蓮寺の檀家なれども、さうとあり、とて、や、周藏も

ともひやう丸はさうあつて来りてその僧子面會しむく
 尋來りて心底に悦びしをいひあつてまじくやう
 たゞ空しく對酌すあつてあつて酒後を催しあ
 つめしとも子飲んて興あつてさうとこれらも凡そ五
 十人あつてもあつてあつてあつてあつてあつて酒肴
 をまうけてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 せぬその升數をさうに壹斗四升八合とや次で八人毎
 二三升さうものたんとあつてあつてあつてあつてあ
 嘔吐し苦しむもあつてあつてあつてあつてあつてあ
 周藏とあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

ちちもれく、と子周藏が家居ハ一里さうもさう僧の宿
 はそれよりさう十七八丁も遠り、さうさう雨さう出たる
 子二人さう雨具をつけ足駄をきてさうさうあつてさう
 さうさう

焼酎の書

同じさうさうさうさう諸侯が此馬の口さう下をの二十ぐれて
 酒をさうさう常の酒ハ酔さうさうさうさうさう焼酎をさ
 嗜さうさうさうさう行たりんあつてあつてあつてあつて
 子ハ焼酎五合をさうさうさうさう五口は飲やうさうさ
 とさうさう顔つきをさうさうその店子居あつてあつてあつて

て、まゝとふんざりあり今五合いまごごあままをんハいふよとらふくのを此
 およろこびてその五合をあまの苦もなくまゝ五口ごくち子飲のぬ
 ちねやうの人の此ひんはひもやそのうハいふよとらふくのを此
 バ飲のくしとらうがれハその人ひんより合あひて五合をあえられハ忽たちまち
 飲のををれまよ、今もあま興きんドて廿ふたハうる人もあまのり
 ちといひのしとらま、家いへあまのきりつけて奥おくより立出たちだつてそ
 此こ人ひとこそよも飲のまいといふ子猶なほあま飲のまんといふ子よりあま
 又五合をあえらまよ、あまハれまよあつて禮れいを述のべて飲のり
 て、これをもめて十分じふぶん子焼酎やうちゆうを飲のたるとよとよろこびつゝ
 ぬさてうら馬屋うまやへ歸かへりて常つねにうらうらとあつて、煙草たばこ

吸すハ忽たちまち口くちより炎えんつづくとをえが、あつとをうら子身みうら
 びりて卒倒そたうしたうらや、まて南八町堀なんはちまちほり子こひとり住すまのものと
 まる焼酎やうちゆうをすがれて好このうら、あつ夕ゆふなれ多く飲のて、これま
 うら即すなはちたり、そのあれた日高ひたかくさし升のアをもうのまのこ起た
 もいでざれバおとづらふとてあつて、戸とををり、うら
 見み子こをうらも冬ふゆのくあれハ火爐ひろに傍そばにうら卧ふし、總身そうしん黒くろ
 焦やれてをて居ゐたり、あつ子煙筒きせつ煙草たばこ入いる、うら
 あつ、これハ煙草たばこを吸すた、ものあんとをひり、焼酎やうちゆうハ
 燃性もやうせいのりれなれハ多く飲のくらん後のちハ煙草たばこを吸すてハ、いも
 つゝむる事こととふ、此話このことばハある官醫くわんいのまれあつて、

聞き 聞えりしやありとや

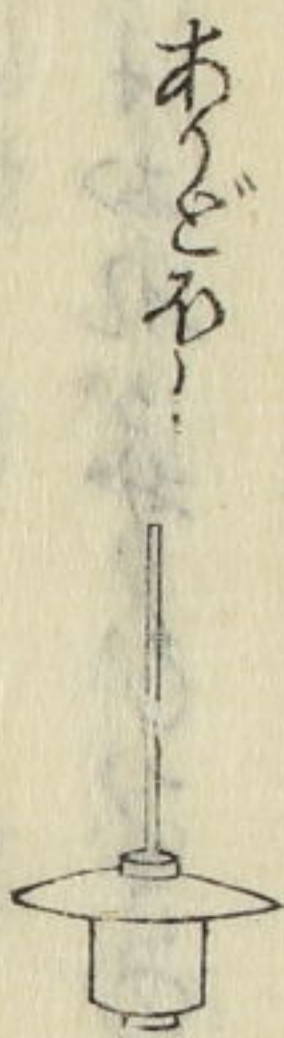
酒席の遊戯

人情じんじやうのわらわぬれあれど何なんとや流行りやうをよき世よの
 らひよて酒宴しゆえんの席せきも興きやうをそつ戯たがひも多おほき子こ拳けんをう
 とのこも今いまも絶たえん専せん行かうはとぬるう拳けんハ唐土たうどあても
 めもあつて通鑑つうかん後漢ごわんの隠帝いんてい紀きもをるう手勢しゆせい合あまは
 押陣おしぢんあつうらさて事保きやうほのころよ相撲すまみもあつて拳けんまう
 さて手腕てぶね小こまをうけうらるるあり遊女ういぢやう玉菊たまぎくの技わざ子こ巧たかみ
 やそりの玉菊たまぎくが紋もんつきたる拳けんまうのそと近世きんせい奇跡きせき考こうまえ
 えりうさて拳けんまうの品しやうあり蟲拳むしけんハあや拳けんもうへ

孤拳こけん虎拳こけんをう至いたりてハ拳けんの名なハ花はなをうやおや酒席しゆせき
 の戦たたかひ子こ予よう年ねんのころハ正直ちやうじき聖天せいてんさる獅子しし子こでやあろ檢校けんけうや
 んやう座頭ざとうさんやうをうとや酔よめ後ごのあまひ子こせりも今いまハ拳けん
 より外あつ子こハ大おほきハすうとま子こハ又またそれありもむり子ここれ
 ちよとちよとさうあつてとふふ互たがひの戯たがひあり今いまも歌舞かぶ妓ぎ狂言きやうげん
 の忠臣ちゆうしん藏ざう七段しちだん目めれ幕明まくあき子こハあつてすうとまむりむりのかごり
 をるが豊芥あふかひ藏ざう本ほん子こ安永あんえいの印いん本ほん子こ能よ似に畫えとら冊子さふしあ
 りその中なかつ子こおれが替かひつきの肴さけがあるとありあつちよとちよ
 うとあれをうとつてさうあつていごでんす圖ずハ次つぎとさ
 その圖ずをうあり左ひだり子こ一二いちにを載のす



さくらぎ扇



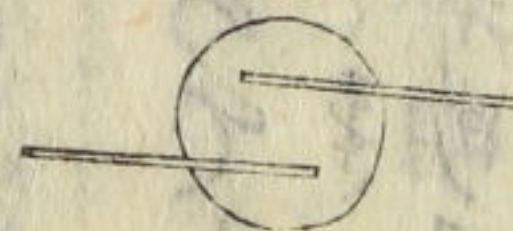
茶壺 七十一

あしき



扇 七十一

霞子月



ちやん 七十一

このそり



茶壺 七十一

このの戯れはあつたれをりおひやう

声色つひ

俳優の語音をあつたれをりおひやう
 を声色つひとて今ハうとて雨のや夜ハひく
 うとてを唄ひてつひ出すとてぬあり大むく
 請取たりやその次ハこれも同じ役者にて市川海老藏
 のこますとてそのあつたれハ市川海老藏とてあつたれ
 まつひ出ハ五人とて七人とのつひをとりて留子短セう
 ありおひやうとて定まりあつたれそのつひハ長居ハおそれ
 ありおひやうとてあつたれとてあつたれとてあつたれとて
 袖さぬへのおいとまでトあつたれとてあつたれとてあつたれ
 たりとてあつたれとてあつたれとてあつたれとてあつたれ

つゝこののちよりおひひうらうら十五年前より扇をうきびまつ
ふとよれりたり砂まきををいさもあれ坐席までおひりけ
とく面をおひりうらうらとよれ

女藝者

吉原の女藝者といふは此ハ寶曆のころ扇屋の歌扇といふ
そのふたどまれりその初ハ歌扇ひうりありうらうら後おひりけ
外ハ娼家も茶屋もいいて来て細見の中りての前此とこ
ろハ藝者誰外も出りやいふとくまうらうこれよりをうらう後
小大黒屋秀民といふものらんをまうらう藝者ををうらう子
と肩書して見せも遊女と同じくあり居て客をうらうた娼

家もありきそのまハ藝者といふは此ハさう日かく遊女の中
少く三線をひき唄もうたひりともて多くハ新造あり三線
のできる新造をおひりよおひりて呼り弾をうらうとれり見せ
子ありあるときも三線をひきたるありこれむり
よりれきむり中よりこれありりつとをうらう今も
又ををたる時子うらうきをひくハ三線番とて新造ハ役ありと
り伊勢の古市越後の新瀉をいハ今猶遊女の中少く唄も躍
もすことむりの手がかり歌舞と遊女の日さかをうら
色のゆれハ高上よりまへ自ハ結歌も美せん又ハ不得手ありも
ありより後子ハせぬとありうらうらあもあうらう京攝も同ト

切のむこままで、一目千軒子大夫天神ぶらう三線ひらぶら故牽
 頭文郎を呼ぶ又藝子といふもの外子ありむらひあり
 子寶曆元末の年子といふものとあり、また、濟標こた、た、二女郎
 といふもの、八揚屋茶屋へおれ座敷の興を催すためのゆれ
 あり、琴三味線胡弓ハハ子さきありむらひ女舞をいふと免
 しのものあり享保年中より藝子、こら、よ、出来たりとも
 あまは江戸よりハハ子さきを命、こら、子ありひて吉原子てをい
 め、も、あ、る、江戸おもをとり子ハハ子よりありたれと女藝
 者ハ明和のころよりありときまたり、それもととハハ子、袖を著
 て今よりハハ子きハハ子されて品もよりよりハハ子、さて女藝者

ハ古の白拍子此かろうをの如くおへ人もあれと、さき
 何、あ、ち、遊女ありいて、躍子此一變せりのあり因子云
 吉原子てハハ子よりよ、二拵鼓子大鼓を兼ると女藝者の技
 子、今、絶す、さ、京大坂おも、藝子の唄子大鼓をこの
 噺子と入ると、と、あれど、その地、ち、とより、座唄をうと、者か
 い、より、上方唄の、か、り、され、ハ江戸の如く、下座、お、ハ、下、れ、鳴
 物子定、ま、る、手あり、の、上方唄、ハ、謠曲、此、詞、を、り、た、ら、か
 多、れ、ハ、猿樂、此、大鼓の手とあり、ひ、お、わ、て、その、間、を、合
 す、と、と、り、その、外、大坂、此、坂町島の内を、り、め、諸國、乃
 舟、つ、ぎ、の、湊、を、ハ、豆藏、の、を、り、れ、と、く、松島、ハ、川崎、お、ん、と

そごうふみく小客七遊女もおのがあつ拍子をとる大鼓を
うらふともあつりけり吉原もともこのあつはしとれや
どつろふとも小唄子大鼓あつするとも金席上の子ぎやうか
らんためれもともハサのれど鄙の手少りあつとハこれ
里ハせてもあつかんや

ちうやたらう

猿樂の翁れうひもの詞うく明解や謡古抄増抄法
音抄拾葉抄等の諸注釋子すべて翁と載せず案する子
南留別志子とつりたらうやうらうといふともハ樂の譜か
る陀羅尼けりともつりともひつともかんといふで樂れ譜あふ

るといふも亦非ありとつりたらうハ都曇答臘の字音ハ
轉訛やあり吳萊題が羯鼓金子大聲喟と忽放肆都曇
答臘矧敢前とええて都曇答臘ハ鼓の名あり隋書音
樂志龜茲此條子都曇鼓答臘鼓あり白氏六帖ハ都曇
答臘本外蕃樂都曇似腰鼓而小答臘即蜡鼓也とい
了瑜伽論の十種聲ハ中ハ都曇等鼓俱行聲ともあ

ちうやたらう

ちうやたらうハ笛れ譜あり體源抄青海波れ條子聲歌
太良利知良利ハ良太利良利打夕取とあり源

氏物語子、たげちりちりくとうとあどりきえへを中りう子ひ
きたるよふおともうらあくやあきさうとあを細流抄子、
笛の音を志やうすあう、たげちりちりくたう唱歌あり
とらう、後拾遺和歌集のうたふ、

笛の音れ春地のろくきとゆの華ちりたうと吹ハあり
ううともあう、近きものあう、貞徳が油槽ももうそとつあ
そふとこそえれといふ句子、さうあう梅ちりたうと笛の曲と附
たうもあう、證すべし、

鳴ハ瀧の水

あふ瀧の水とあふ古ののを祝とまうと年詞とんえ

ア、拾葉抄子ハ當世酒宴小三國一とゆといふが如く、むうハ
酒宴子あふ瀧の水をこひありとらう平家物語の額
打論小二人とて走いて延暦寺れ額をまうてあう、さん
うち破れしや水あふ瀧の水日いてともたえすとら
てと中つ南都の衆徒れ中アそ入子らとあり、このちや
詞源平盛衰記義經記あともえをう、日いてともたえ
たうたうといふ、このたうとらうハ水のたうとあうとらう同
詞あり、陸士衡が歎述賦子水溜々而日度註小溜々水流貌
とあり、

あがまをぬんぞやひろぞうやぞんぞや

あけまたやどんとや、ひろがめやどんとや、催馬樂の詞あり、
寶方朝臣家集子あり、女子あやかりたるうらとふあけまきを
むらびくたせしむれば

ひろがめやどんとや、ひろがめやどんとや、催馬樂の詞あり、
寶方朝臣家集子あり、女子あやかりたるうらとふあけまきを
むらびくたせしむれば

おろきん

おろきん、のわろきんハ于思の于子發聲のおやそんそん
あり、運歩色葉集子于思翁申樂三番奏之詞也とありト養
狂歌集子あり人のゆくへ正月七日子行ハ七とされよ
といふあやどんとやとてひて、

于思翁、おろきん、のわろきんハ于思の于子發聲のおやそんそん
あり、運歩色葉集子于思翁申樂三番奏之詞也とありト養
狂歌集子あり人のゆくへ正月七日子行ハ七とされよ
といふあやどんとやとてひて、
といふも證とす、さてあめ于思とて、老人の鬚多きと
形容したる詞にて春秋左氏傳子出たり宣公二年傳子宋城
華元爲植巡功城者謳曰睥其目儲其腹棄甲而復
于思于思棄甲復來註子于思多鬚之貌又西打灰
と見ると、これハの翁は鬚の多きハ老人の壽瑞相あり
祝したるなり、猶らの翁は詠曲は詞子あまのをとめは羽
衣ハ佛說樓炭經の石切のこよ三穗の羽衣は故事とあり台
たりと見え萬歳樂ハ平調曲の樂名あり天下泰平國土安
穩とハ八字連續なる熟字ハ華嚴經子ありとて、今經文

を檢すりしありしより千秋萬歳の語ハ家語韓非子を
子見えて本文を鈔出するもなればわづらひの
舞に奉説ハ詳ありと住吉の御神を表し作れるのあやと
し世すしあれどあやふらむと今こまに遠碧軒隨
筆世事談綺をよもいささか説あり

南方海島の風俗

ある人のもろし伊豆七島のうち三宅島をよみてハ村こ二
三軒づのあき家ありて造作もありて住むるありありそ
此家を地のゆれハ烈とありその村に女をんの經水きんすいありし
ゆのハさかひが家ハ寐ね居しそありと子こ行ゆきく夜よに

とやされハ經水きんすいありしともされハたおとより朝あさ
より起たいてころ家やへ行ゆ緑きさきふく朝飯あさひと食くひ夕ゆふ
けも同じとあるあり山田やまのの色いろをそとくハ常つねありとあり
その日ひ得えたものハこが家やに庭にわに抛な入い夜よにハ又また
ふとつて宿しゆくあり、まゝ寐ね宿しゆくとてまゝありたる家やハ村中むらなか
あてころき男おとこどもれ多くハこが家やハ年としころ十五六歳ごじゅうろくさいあり娘むすめ
ありしゆものハこが家やハ寐ね居いすしそつうの寐ね宿しゆくありし寐ね
さるるありしとつても同じ人情にんじやうもくころ氣きある娘むすめをハ
寐ね宿しゆくを行ゆくとそをよむハその親おやどものいさやハさてもあひ
あき者ものをよむ年としころあり娘むすめとありとありハたま

或ハおぼくをてて寤宿子やれうとぞおの姫婦のすて産
臨むけつる庭にて近在の臺所れ土間のごときあり
その庭へ薦を敷て産所とく、とうあけをさふらふとハさうま
きて近きあうりの者來りてせむをすまひ、いおく志まうに
おしううてそや産れんとすまひ及びて家中のれれと手
ハ藥罐のやあひハ茶こん何れも音あふのれを持て、そ
のあうをらんくちんくとたき立て高聲子、さアてらや
れてろ今出ぎで、まのいひつとも中たて平産すれ、おれめ
てうとして庭よりうくあけすまひ平卧さるありとを程
遠くぬ伊豆の海島さる風俗もありなるよとまことふ言語

も絶てをうくもありさるおろくもさうりもこそ、

天狗の銅印

下野國宇都宮のやうり子東廬山盛高寺とらふ精舎あり
第四世を祥負和尚といひて永平十一世れ法喬文明叨應
のころ此寺子住職たり永正八年遷化とらり、きて切の
祥負和尚の手く技子拙くさうり、あゝ時天狗の來
りて、さう和尚れ手と志が、うらと借けやたをさうり
きて所望ありと云和尚らえていふ手とらきんと、いとい心
やすき望あれ、引ぬてもち行まんとき、ハ諾をいご、
さうのそとあ、うらとたををれといひられ、天狗云、さうハ

あつた借とまゐいをうそれとて足れつといはさ
 借まのす下といふは天狗謝しとてぬそれより後
 和尚の手つとてきくあまうてのびばされはあまうの令和
 尚と手短の祥貞とあまうてまびうとてや三十日なう
 すまて天狗再来てまう頃借やうたう手と返しやう
 いひ火防の銅印一枚を贈りて歸しとてそれ後和尚の手
 の如く子のびたりとてう祥貞和尚の書も亦火防子
 あまうとてこれ一條ハ外岡北海の地子遊歴れをう
 きとたりとて話あり且火防の銅印
 の押たるもそれとて贈られとて



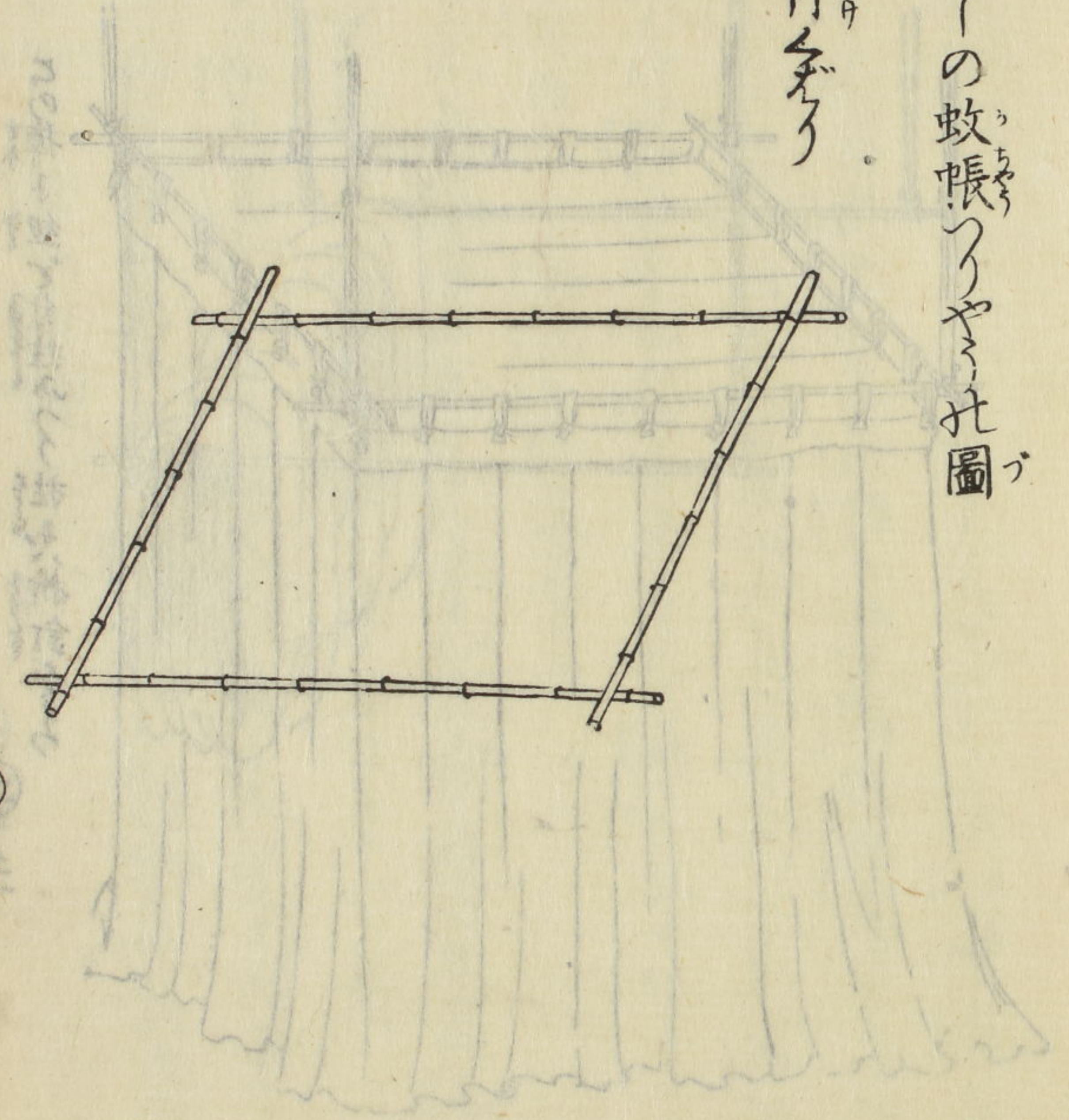
蚊帳

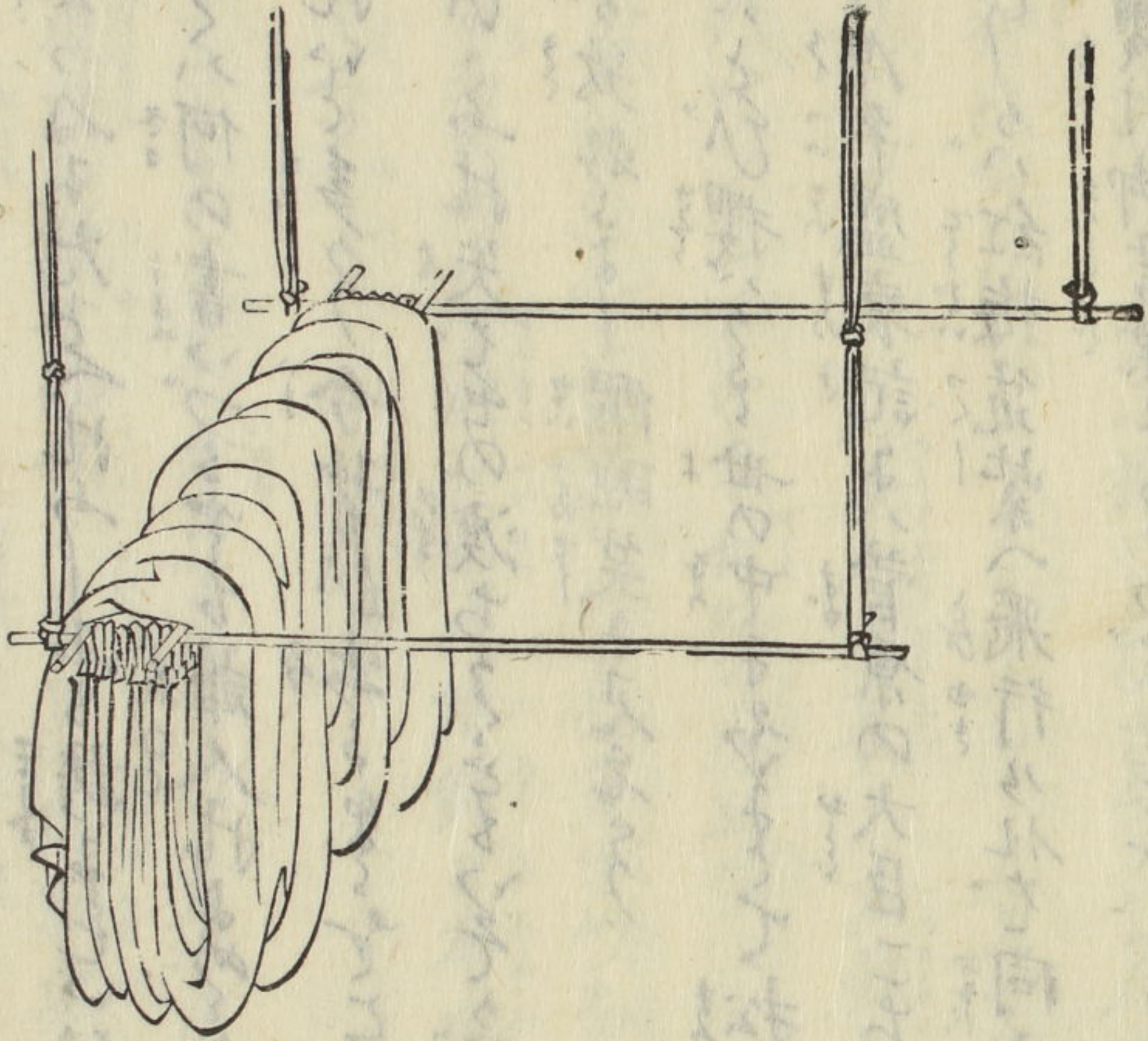
蚊帳とふりの今ハ家毎にあまうてうかたぬ物なれと古書
 蚊火をこそ和歌あもよめ蚊屋の名ハこつう子太神宮儀式
 帳延喜式子見とてうまて春日験記画詞小白き蚊帳をうけ
 たうとてあまうてう近くハ吉田鈴鹿家記寶徳元年四月九
 日花園殿より蚊帳参るとあまうてうかたぬ物なれと古書
 日ハ今の如く夏月ハあまうて蚊帳をさぐとてうかたぬ物なれ
 不方紐あつとてうかたぬ物なれと古書
 記録子又えとてうそれも日毎子あまうてうかたぬ物なれと古書
 えとてうかたぬ物なれと古書又吉日子をさむとてうかたぬ物なれと古書
 今も邊鄙子ハ

掉すたりつるあつたれ存のこる地ちもあつと名な掉すたりてつるまハ
 布のどち乳ちつきてあり予キ家スあつとまき蚊帳くまじハち布のど
 小乳ちつきてありされ江戸エドあつと掉すたりてつるまをりつる絶たえ
 たれと蚊帳くまじハ猶まむのあつと造つくれつと見また又また云い蚊帳くまじの
 漆色しやくしきハ崩くずれ黄わう子ころきぬとあり金樓きんろう子こ齊せい桓くわん公こう卧ふし於お拍ぱく
 寢しん云い開ひら翠すい紗さ之の幃つゑ進しん蚊ぶん子こ馬ばとあり崩くずれ黄わうの蚊屋くまれり
 すすぐぐまま入い蜀しやく記き子こ是こ夜よ蚊ぶん多た始はじめ復また設たて幃つゑとありともんえ
 たり又また云い蚊帳くまじ子こ馬ばを畫えきハ蝙蝠こうぼうあつとと説せつ桂けい林りん漫まん
 録ろく子こあつと馬ばをえきと故ゆゑあつとと備び後ごれり舊きう家か子こ
 蓋おほ子こ馬ばをえきと蚊帳くまじありと大塚おほづか宗甫そうふ之の

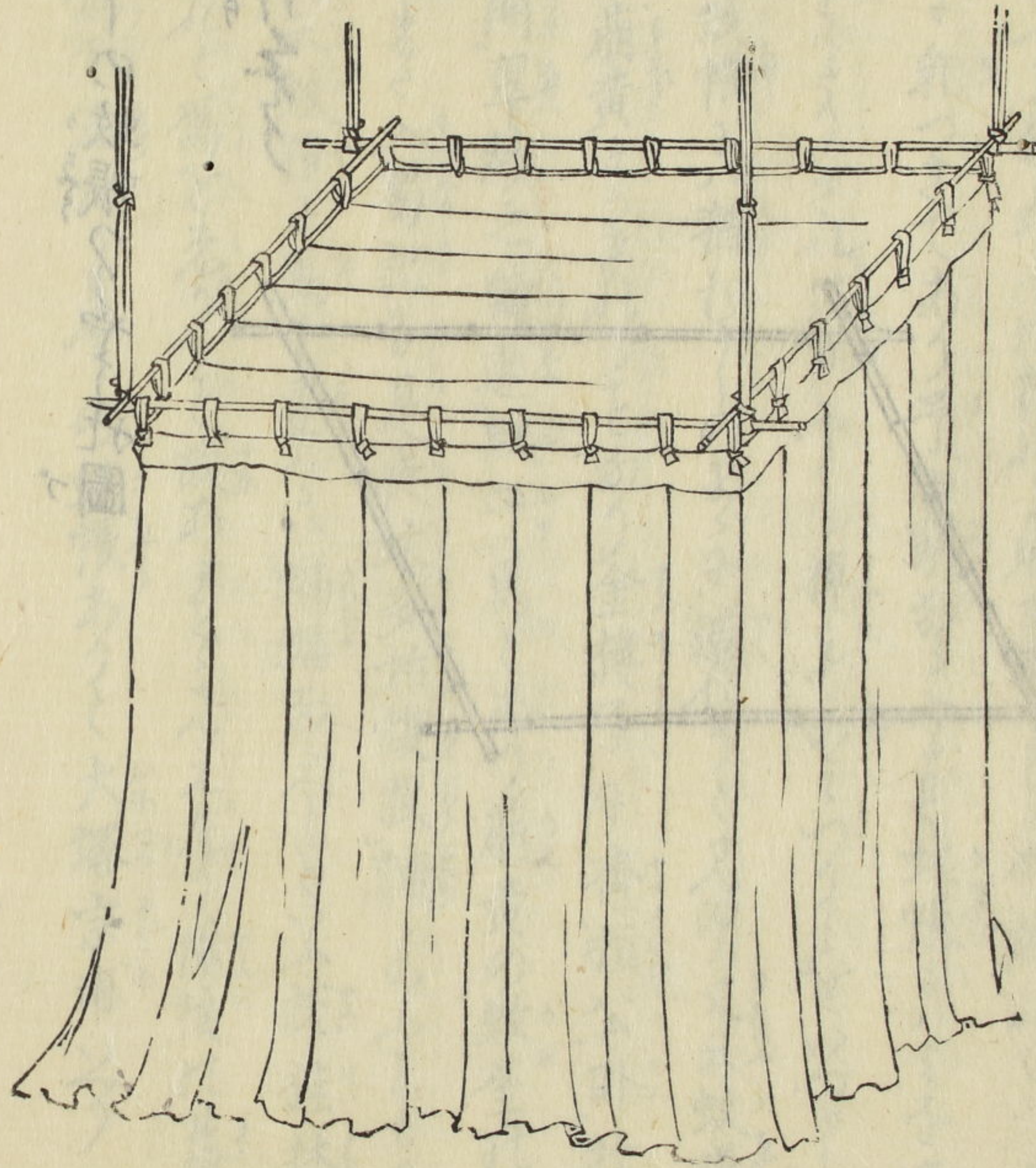
むむの蚊帳くまじつつやや此こ圖ず

竹たけをえき





① 十一



この掉子紐を付挂ふつり挂子ハ折釘をより

② 二十

口碑子傳書和歌

世の人々ぬきたとこれうも誇まといひづる和歌ありはれ
ど多くハ何の書いつらやも誰人れよめるといつとの志をれさ
るればと多く今世のひ出るもやとこましく

宗長が歌はるより 醒睡笑子又えらう
わいふれ矢もその渡ちうともいつそふまのきせこの長橋

梅とび櫻はうも世の中子あまて松はつれ子めららん
こゝろ源平盛衰記ハ菅原の大臣こちふらハといふ言をま
たまひうハ紅梅筑紫へ飛行ルれを同御所子あひてあ
るも櫻れ御言葉子くらさるととととと一夜の中子枯

子々を源順が歌ふ梅とびささうハねぬ菅原やうくそた
のむ神れちるひととよとらうとええらうこの言子うて作
まうけしやあえん本居宣長を此歌を順といふも本未子
あをんといつてまきあありとせう

ちうきよのとをれねらうの言免せめあまのうらめはれはあよ
知る子あの方ハ全漸兵制此附録日本風土記子足えて琴譜
れうととと

かゝるときさこそ命のとううあうねてれき身と思あはれハ
大田道灌の辭世れ歌と萬里が梅華無盡藏及び武者物語
ふちひ世今させりて誤かり暮景集子あはれ道灌が子

の討死ある時子あり歌あり、

目ハやすく耳ハせまきそハ落ちてうらふ雪のつり年子

渚松和歌集子あり、

下野の室中まふまふうたごゝろよつかやらん

慈元抄子入るる、

やみの夜ふあめ鳥比聲まけはうまぬさきの父ぞ戀き

東山義政公の詠あり長頭九隨筆子入るる生下未分

といふ冊子子ハ母をこひき子作らん

この二ハ父を愛するのひと柱をばハ雉もろれあり

續狂言記禁野の條子入る安居院聖覺神道集子あり、

雪をれて後のひくとサ子より空あり明比月

あの房と世子傳子弘法大師の勢といひあそハ室鳩巢の大學

比明德と詠る言ともいどあやまりけり佛國禪師の歌あり集

子入るる三國傳記子鞍馬寺多門天の御歌れよりい

了、

ゆとこを失ふ

金銀米穀を借て年月よその利息を取たつると古より公私

子あるをあり是を息といふハ蕃息の意あり、ふえまさると

あり人れ子と子息といふもふえらうまていふありされハ今

關東の田舎あり利息をやぐり子といふハその意たがらん、

世諺セゲン子こりことこを失うせしてしよも本もとと息いきぬり俗ぞう子こ云い元利もととしのことを

ふまいさう

往古こいへハ往吉むかひよし神領かみりやう北中きたなかつハい字あ及およむす船路ふねぢ歩路あぢ子こより諸國しよこく
の年貢ねんぐ上分米かみぶんまいを當社あたしやへ調進てうしんすことありとさうり上分米かみぶんまい
といふハ運上米うんさうまいといふが如ごとく俗子ぞうこ上米取かみまいとといふハこれより出い
たる諺ことわざなり、あまは口米くちまいといひきたるはハ百石ひゃくしやくつとくる船ふねよりく
壹俵いちばうを取とりて三俵さんばうつとたるは駄荷だにまでも幾升取いくさうとといふがごとく、これ
物ものつきて歩米あまいをとることなり、
あもやまのゆめさうり

あもやまのゆめさうり

何なにれと話わをすすをよもやまのこれがさうりしてあどつふふのよ
もや海うみといふ詞ことば子こ四方よも山やま北きた字あとありつハ訛あやまりあり、書紀しよき雄略ゆうれつ紀き
子こ旁眺あまねくハ維い折衝せつせう四海よしのをとあり、八維やちをやもと訓おとハ八面はつめんの義ぎ
あり、繼體つぎみ紀き小八方せうはつぱうとやあもとあり、これハよもやまハ四方よも
八維やちの轉てんありと通證つうてい子こなり、

つげ猫

手足てあし顔かほをありつきよこれたを俗子ぞうこつげ猫つげねこのやうありといふ
諺ことわざあり、今昔物語いませきものがたり小灰毛斑せうはいげあり、猫ねこといふ詞ことばあり、よもは肌はだの
ありつきよこれたが、灰毛せうはいの猫ねこはとくありと云い意いがべり、まさ
猫ねこハ寒さむきを嫌きらむ性の獸けものあり、龜かめの中うち子こ入いり、灰はいはまあま毛けのよ

(三) 廿四

おれた子たより一、慈恩傳子外道の事を竈を侵す猫の如くつゝも忍えり、

窮冬

今年あけて去年の冬と舊冬と云う、吾妻鏡治承五年正月十一日の條に窮冬とあり、舊冬と書んばあけつねと窮冬と云ふもあつたふゆり、

七里のつら

佛説安宅神呪經に七里結界と云ふあり、弘法大師の行狀記に高野の山れと云て悪神等かゝるか我結界七里の外に出去まゝ結界七里の間地主山王ちりひて守護したまふ

とあり、俗にいまさらふとのあれば七里のつらとせつひぬをいふ、この七里結界といふものの轉訛せし詞あるべし、

せつら島

いふと子世話をやきて身力を勞すをせつら島といふ、たゞかゞいふ諺あり、故事因縁集に神國に生るる人が現世の神明をすく未來に佛を信仰す、六才太郎島へ走り過るといふとあり、これハ諺のせつら島ハ才太郎島の轉訛に似たりといふも、松の葉子載る三勝心中といふ小歌に詞にいふや取期を急ぐといふて大屋の東にさつら煙露が志をれり身や志を雨といふ文句あるとあり、大

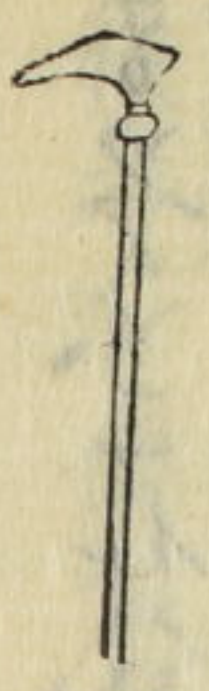
坂の三昧所あり此地名ふてもありや、續小夜嵐子、その上
兵糧のさつさつをけりつげ侍れはたやすく討とるあり
まじとてさつさつをさつさつ、一冊子ハ作者をれさつさつと西鶴が小
夜嵐子つぎて地獄極樂と合戦子作意せりものおれバり
ハ冥府の縁ふりて茶毘所子近き地名ふやまじつらふふ
後考と俟つ、

まじの手

痒と抓の具をまじに手とさう孫の手れさつさつをまじに人もあ
まじとさつさつを正しくハ麻姑手ありハ麻姑ハ仙人の名にて、
の麻姑仙人が手の爪ハ鳥爪れ如くぬれハ背の痒と抓子よ

ろくと云とあり、列仙全傳ハ麻姑手似鳥爪蔡經私念
昔痒時得此爪搔之佳方平即知鞭經背曰麻姑神
人也汝謂其爪可搔背痒耶方平去と見えたり、されハ
唐杜牧之詩ハ杜詩韓集愁來讀似倩麻姑磨所抓
と見えたり、これハ杜甫が詩韓愈が文ハ痒き所ハ手のさつさつとい
ふ諺の如く詩文の巧あるよたとていさあり、運歩色葉集
ふも麻姑仙人也學仙道剪爪服無之依之爬背物名之
とあれバ、さつさつハさつさつとわりのさつさつ、さて今の製
如く人手れ如くハ鳥爪とさつさつを思たり、ふ過一癸
未のさつさつ羅漢寺れ普茶のさつさつ、その寺れ什物子舊高

泉和尚の藏ありしといふ唐畫の十八羅漢の畫賛の帖あり
それ中麻姑手をとりて像ありその製鳥爪の如しこれ
ふよりく年をうけ疑ひをけたりき又云賛の詞は木童子と
ありハ麻姑手の一名といふなり竹婦人比的對といふべし
唐畫麻姑手の圖



如意ハ痒を搔き心のあはれをなれバ如意
と名をとり釋氏要覽にええりるれバ如
意と麻姑手とハ一物異名あり

第五諾矩羅尊者の賛

善心爲男其室法喜背痒孰爬有木童子高下適
當輕重得宜使真童子能知茲乎

初雪や犬の足あり梅北華

松名晏此條見
骨董集上編
初雪や犬の足あり梅北華
骨董集子初雪や犬の足跡梅の華と云句の正をいひて五元集
小雞去畫竹葉これハ五山沙の僧に聯句子犬走生梅華
と云對ありとあり予より堅瓠集をよめり古有絶對
云雪鋪满地雞犬踏成竹葉梅華といふとありあれ犬
のあり梅と梅のちあひの證とすべし

般若の假面

般若之說詳
見善庵隨筆上卷
般若の假面
世に鬼女の假面を般若といふハ昔ある女房の妬少きをい
まめんといふ般若坊といふ僧のちありありと云やその假面
今子傳ふといふハ

刀劔の具まゝ帛の名もあつたといふあり、今ハ七子とわたり、
 のくハ金具子細點をつくるありとて、帛の織目もくハ具乃
 細點子似れば、あつてあるひある、其紋ハ魚胎子似たるを
 りて名づけたるを、魚を古語子ナト之ハ魚子の義子
 くハナとあつハ音便、古言子その例少く、装劔奇
 賞子、アもあつ、因子云ハ魚ハ古言子ハあつ、常子
 ハウヲとあつ、食料子あつ、とき子ナとあつ、すくた子そ
 此物をもしてハ名をよび用子あつ、てあつ、のうれとてあつ、
 水と常子ハツとあつ、食料子ハモヒとあつ、主水をセンドとよ

むハモヒトリの約、ア、銭も體ハハゼニとあつ、用子あつ、てア、
 とあつ、ハ料足ハ義あり、

ひやうー おふ

吉原へ見物のまゝ行くを素見とひ、俗子ハひやうーとあつ、こ
 まハひやうー山谷子ハすき、之の紙を製する者多く住する、
 その紙漁りの方言も、紙此たねと水子つけ、あつ、そのひ
 やく、あつ、不行、て廓の子き、をひを見物、し、あつ、出、
 詞、あつ、と今ハそのとを、れ、を、あつ、人、あつ、と、松澤老泉
 の、あつ、り、き、あつ、遠國、あつ、俗子、茄子の、枯、と、舞、と、あ
 加賀の邊、邑子、舞、を、する、もの、多、その地、茄子を、産、す、茄

子のありき年ハ舞者四方よりて錢穀を求む故に茄子の
 枯きも亦て舞とて之と兼穂録に記さるる俗語此轉訛
 大おぬことの類多し

四萬六千日

七月十日を觀世音の四萬六千日と稱して淺州寺を(ハ前
 日より參詣のり此羣集せり、ゆゑ月毎に一日の功德日あ
 りて觀音欲日とす

正月朔日 向百日 二月晦日 向九十日
 三月四日 向百日 四月十八日 向百日
 五月十八日 向四百日 六月十八日 向四百日

七月十日 向四萬六千日 八月廿四日 向四千日
 九月二十日 向四百日 十月十九日 向四百日
 十一月七日 向六千日 十二月十九日 向四千日

江戸庶子に記さるる中七月十日ハ四萬六千日に向やとい
 ふよりて此日子よりて人々をさしおぼしむると見ゆ
 り、此ハ淺州寺の境内にてこの日茶ををきあひの
 いでり多しハ田舎の茶をいひておぼしむるともや寛
 政のころよりたることとす、また揚枝にせし下袋とて附子
 の粉に袋を赤紙とてつね軒とふさぎをとりありしが、これハ
 文政にたぬ小江戸より三軒ありてハ見及ぶるき今ハ雷

けとて玉蜀黍とうもろこしと専ひきまらうとあども文化ぶんかの未いま初はつ今いま子こさん子こ
 何事なにごともあま手てがうう年としを追おうたをぬると多おほくうらうら
 (三) 廿九

九月二十日 九月二十日 九月二十日 九月二十日
 十月十日 十月十日 十月十日 十月十日
 十一月十日 十一月十日 十一月十日 十一月十日
 十二月十日 十二月十日 十二月十日 十二月十日
 一月十日 一月十日 一月十日 一月十日
 二月十日 二月十日 二月十日 二月十日
 三月十日 三月十日 三月十日 三月十日
 四月十日 四月十日 四月十日 四月十日
 五月十日 五月十日 五月十日 五月十日
 六月十日 六月十日 六月十日 六月十日
 七月十日 七月十日 七月十日 七月十日
 八月十日 八月十日 八月十日 八月十日
 九月十日 九月十日 九月十日 九月十日
 十月十日 十月十日 十月十日 十月十日
 十一月十日 十一月十日 十一月十日 十一月十日
 十二月十日 十二月十日 十二月十日 十二月十日

